

## 巻 頭 言

「なにか新しい物を！」ということで始めた21号のスプリングのテーマは『僕たちの時代』です。従来のスプリングとは又、違った角度から僕たち大手前生の生活や意識、つまりは青春を見つめてみようというわけです。

さて、今号で特に目に止まるのは自治会欄の充実と文芸欄の量であると思います。後期自治会会長の中村君の協力により自治会欄はなかなかの盛況を見せました。文芸欄の原稿の量には編集部一同うれしい悲鳴をあげました。できるだけたくさん作品を載せて、読みごたえのあるスプリングを——ということので「クラス紹介」、「クラブ紹介」、「先生紹介」、「行事紹介」のページをけずってこの文芸欄にあて、「クラブ紹介」については、それが必要である者、つまり新一年生にのみ四月に文化委員会から配布する予定であります。よって、今号の「クラブ関連記事」では、これまでのような「クラブ紹介」ではなく、「クラブを通じての個人の体験記」みたいな物を書いてもらいました。「先生紹介」では新任の先生方4人にしぼって書くこととなり、「行事紹介」はその役目を生徒手帳にゆずることとなって削除。一番もめたのは「クラス紹介」です。当初、削除する予定だったのが、「記念にはちょうどいいから……。」という三年生の要望で、三年生のみ載せることとし、「20号までのようなものでなく、クラスを通して自分が感じたことや体験したことなどを書いてください。」と依頼しました。さあ、どうでしょうか。新しいスプリングにあなたは何を感じるでしょうか。青春という言葉の意味をこの72ページの中に感じていただけたら幸いです。

目次

◇巻頭言……………	1
I 自治活動を考える……………	4
あくまでも理想として	八幡 惣一 自治会私見
無霧夢	梅澤 寛明 今の自治会について
自治会	中森 敦子 「僕たちの時代」へ向かって
限界—文化祭狂騒曲	松浦 正人
中井 修二	
喜田貴美枝	
中村 栄和	
II 青春とは何か……………	13
◇青春・将来……………	
青 春	山崎 陽子 夢想するに
「青春」って何?!	沢田 渉 若者に告ぐ—自戒をこめて
◇クラブ体験記……………	
One for All, All for One (ラグビー)	よりよい新聞作りをめざして (新聞)
汗とつらさと喜びと…………… (硬式テニス)	漫研への道 (漫画研究同好会)
せいぶつ いきもの なまもの (生物)	
III 見つめ直そう大手前……………	17
◇訪問記……………	22
「ふれあい」を考える—中塚五郎先生をお訪ねして—	
魔法使いの見た東高校—二十一世紀へのパスポートを手にするために—	
◇わがクラス (三年生)……………	25

◇大手前 いま・むかし ..... 35

実験を通して見た大手前生 内本慶次郎先生

事務室を訪ねて (インタビュー) 大野さん(マスター)へのインタビュー

IV 先生紹介 (フレッシュ先生に聞く) ..... 37

岩井晴彦先生 桜井 洋先生 杉岡 茂先生 森 一雄先生

◇詩 地球へのピクニック ..... 41

◇文 芸 (一) ..... 42

試験ア・ラ・カルト 富山敏郎教頭先生 一つのレクイエム 浜田 一郎先生

冬の四国周航記(リースまえ) 井手 昂 先生 花 火 岸田 尚子先生

大切な人との出会い 縣 喜樹 先生

◇文 芸 (二) ..... 52

Duck Du 川を下る 田辺 りさ CHAOS — 混沌 — 中坊 滋一

気体の臭い 楠本 洋美 忘れていた光景 溝根<sup>ツチ</sup> 武史<sup>ノコ</sup>

冬 陽 中瀬 祐美 「泣く子」と幼児教育 浅野 晃

運 命 (さだめ) 深水 康子 僕の音楽談議 茨田 通章

ある武将の生涯 宮田 昌彦 普段着旅行—沖繩見聞録 大山 憲司

夕まぐれ 椎の 実 七月、旅出つあなたへ あんず

白昼夢—親愛なる幻影に捧ぐ— 石川 培之

◇編集後記 ..... 72

表紙。二年五組 小菅陽子 カット。美術部、漫画研究同好会他

# I 自治活動を考える

## あくまでも理想として

前期自治会会長 八幡 惣一

今までに立会演説会などではしばしば言ったことですが、現在の自治会が解決すべき最も大きな問題は、どうしたら一般生徒が自治会に関心をもってくれるかということです。生徒が自治会に関心がないことを示す例を挙げてみましょう。それは、自治会本部室がどこにあるか知らない人がいるというつまらないことから始めて、生徒総会に出るのが面倒だからといっていやがる人がいたり、代表会議で反対意見どころか質問さえほとんどの人がしないという状態であることなどに表われています。このように無関心では、かつて本部役員が一般生徒の非協力的な姿勢を批判したことがあるのも、むしろ当然だと思えないでもないでしょう。

しかし、本当にそうでしょうか。本当に一般生徒だけの責任だと言いきれるでしょうか。仮に、ある人が何らかの理由があって自治会活動に関心を持つとしたとします。ところがその人は何をすれば良いのかわからなくなってしまうでしょう。その人が掲示物や自治公報をいくら読んだところで、完全な知識は決して得られないと思います。もしそれを得ようとするなら、実際に本部役員にならないければならないからです。また、今まで自治会は生徒に対して何か関心をもってもらおうようなことをしたでしょうか。そして現在して

いるでしょうか。いつも行事の準備に追いまくられて、その間に勉強やクラブをしている人にそんなことを望むのはかなり無理があるように思います。

さて、ではどうすれば自治会活動に関心をもってもらえるのでしょうか。その結論を出す前に自治会の現状を少し述べたいと思います。まず一般的な自治会本部役員の任期間内にすることを言いますと、最初に慌ただしく立候補者が決められます。そして当選するとすぐに各行事の準備にとりかかり、それが終わるとまた次の行事がひかえているのです。そしてその間に考査があり、全部行事が終わったら役員を探さねばならず、やっとそれも終えてはっとしたときには任期はもう終わっています。こんな状態では他に何もできません。ところがこんな状態なのに行事運営に関すること以外はほとんど生徒から意見が出ないのです。そしてこの事実を裏返して考えてみると他に解決すべき問題が自治会本部に限る限り、全くと言っていいほどないということになります。自治会本部が解決すべき問題がないことの理由はいくつか考えられます。まず、自治会本部に意見を言っても何もしてくれはしない、言うだけ無駄であるという考えがあります。そしてこれは自治会本部役員に、自分達はそんな問題を解決する力はないという気持ちにさえさせています。次に、問題があってもそれを自治会に伝える手段がないことです。代表会議はめったに開かれないうし、ロングホームルームの余った時間は遊ぶことが中心にされているため、話し合いの場はほとんどありません。しかしこの二つに解決策がないわけでもありません。前者は自治会本部がもっと積極的な姿勢をとればなんとかなりそうですし、後者も、例えば投書箱をつくるとか、生徒手帳に書いてあるような定例

の代表会議を開けば解決できません。

ところが、最後に難問がひかえています。それは生徒ひとりひとりが、問題があるのにそれを言おうとせずごまかしているというところ、気持を多いにしろ少ないにしろ持っているというところです。例えば、自分はある意見に反対であるのに、今までにないことだからとかみんなに非難されるのがいやだとか先生に言われたからだとかいう理由で自分が反対であることを自分からやめてしまう人が多く見られる、ということですね。この問題は困難なものではありませんが、生徒ひとりひとりが自分は自治会の普通会員なのであり、これを運営していく権利を持っているのだということを正しく認識すれば解決の道はひらけます。だから問題があればそれを示し、できるなら自分達の手で解決していくという自覚をみんなが持つことが必要です。そして、そうすることが初めに述べた、自治会に関心をもつということの解決法であるのではないかと思うのです。これはあくまでも理想論であり、本当はもっと具体的な策が講じられるべきでしょうが、それはこれからの自治会がするべきことです。そしてどのような対策をもってそれを解決していくにしろ、その対策はこの理想を根底にしなければならぬと思います。

## 無霧夢

(前期自治会実録)

前期自治会副会長 梅澤寛明

まず、文化祭第一日目第一部について述べたいと思う。本来、文化とは、人間が理想(特に精神的)を実現していく活動の過程を言うのである。綿密な計画のもと、現実を見つめながら、その理想を

表現するのに最もよい方法によって自分たちの考えを相手に伝える。やはり文化祭の出し物には、そうした理想・テーマが掲げられていなければならない。今年の文化祭の出し物の中で特に目に付いたのが、テレビの模倣、いわゆる視聴者参加番組的なものである。確かにあれは、マス・メディアという現代文化の一つの現れには相違ないだろうが、その中に創作的なものが感じ取れないのは寂しい。いや、模倣であっても、それを自分達なりに工夫・発展させた作品はできなかったのだろうか。大阪弁で言う、「おもしろい」「シヨも」ない「だけ」を価値の基準とする風潮が、今年の文化祭の出し物に如実に現れている。この原因はどこにあるのだろうか。確かに準備期間が短かかったせいもあるだろう。しかし、果たしてそれだけだろうか。これについては後で触れることにして、次に私の自治会活動経験後の印象、感想といったものを述べてみよう。

一言で言うとう仕事があればあるでしんどく、無ければ無いでしんどい。これが、自治会である。また、とにかく種々様々な人間がいる。強烈な個性を持った彼らが、各々思った事をべらべらとまくしたてる。ある程度は理路整然と。そして、その発言は、環境にかなり左右される。例えば、文化祭直前の役員や常任委員達の発言には、焦りや険悪なムードが感じられた。そういった時に、どのように自分の意志をスムーズに相手に伝達するか。これは大問題である。ある時は、腹だたく妙にイライラし、またある時は、何もかもハッピーに聞こえる。もう自治会室には足を踏み入れまいと思っていたはずなのに、弁当を持ち、足は独りでに自治会室へ。しかし、そういう人間一人一人の努力の結集が、文化祭、体育大会等に大きく寄与した事は確かである。比較的温厚で少し無器用だが、ここ一

番で驚異的な超能力を発揮する。これが、前期自治会役員の特徴の一つであったように思う。あの、陰鬱だが、ちょっと愛嬌のある自治会室に郷愁じみたものを感じる今日このごろである。

さて、第三に、前期自治会活動の問題点を分析し、述べてみよう。これは、今年の前期自治会に限った事ではないのだが、最大の問題点と言えば、自治がサミットだけの自治になったという事である。

本来、自治会活動は、生徒一人一人の意見が十分反映したものであるべきである。そうでなければ、自治会が間違った方向に独走する事もあり得るわけで、これは、何も自治会に限った事ではない。ところが、実際はどうだろうか。自治会と一般生徒とを結ぶ代表会議が十分に活用されなかったのが現実である。我々役員の工夫が足りなかった事は、十分反省の余地があると思うが、それにもまして、クラス討議の不活性ガスのごとき有様が代表会議の衰勢、ひいては一般生徒の自治会離れに拍車をかけているように思われる。しかし、原因はそれだけだろうか。いや、私はここに、「時代」というものを感じるのである。例をあげるならば、第一に、情報の音声化・映像化。ある瞬間に視聴者の脳裏をよぎった感動、疑問、怒りが、後の音声、映像によって、しだいに中和されてしまう。第二に、型にはまった民主主義。小・中学校において、発言しないでも、多数決を取る時に挙手しさえすればよいのだ、という雰囲気があったのは、皆さんにも思いあたる節があると思う。こういったものの影響を長期間受けているうちに、「ものをじっくり考える」、「自分から率先してやる」、「権力悪・社会悪を許さない」といった必要かくべからざる精神が減退していくのも不思議はない。そして、大手前生の自治会活動への無関心さ、ひいては、先ほど述べた文化祭の出し物の

状況も、このような背景に源が存するような気がする。

一九八〇年は激動の前兆が現れた年だった。日本が、世界平和のため指導的立場を取らねばならない時代が来るのも近い。そんな時、社会を築いてゆかねばならぬ我々若者が、「無関心」でいいのだろうか。そして、大手前生が、自治会に「無関心」でいいのだろうか。日本はある意味では平和である。が、その平和に毒されると、今に大きなシッペ返しを受けてしまうのではないだろうか。今こそ、原点に戻って、真の自治、民主主義、平和を考えてみなければならぬように思う。

色々、書きたい放題、厳しい事も書きましたが、それは私が大手前を愛しているためなんです。役員や先生方と過ごしたこの半年間は、私の生涯忘れられぬ貴重な思い出となることでしょう。お世話になった方々に本当に感謝しています。大手前の前途に光あれ、無霧、夢。

## 自治会

二年三組 中森敦子

つい最近まで私自身自治会に対して全く興味などもちあわせていませんでした。ところが、どういう心境の変化か運命のいたずらかいつのまにか自治会の近くに位置することになりました。そのような事です。それから特にどうのこうのと言う資格などありません。ただ、この様な機会はめったにないように思われるので好き勝手なことを書かせてもらおうと思います。

やはり自治会を語るには文化祭をぬいてはこれ以上やりにくいこ

とはないと思われれます。その文化祭が終わった時の心境はたった一言「大変だった」ということです。例えば一番不評だった一日目の二部にしてもけっこう悩みがあったようでした。どうすればみんながフォークダンスができるか。どうすればスムーズな進行ができるか。おもしろくするということが以前の問題だけで苦労していたようでした。そのために神経質すぎるのではないかと思われるほど緻密な計算もしていました。何事に対しても同じような状況で準備が進められていました。

常任委員の人一人一人を思い浮かべ、あの人はあんなことを、この人はこんなことを、などと思い出します。昔、よくやっていたと思いはします。思いはするのですが、はっきりいって「おもしろくなかった」。何かが足りないように思いました。目に見えないなにかが。たった一人又は、二、三人で全体を盛り上げていくことはむしろ難しい事です。まして芸人ではありません。やはり周囲からののではない。極端な事を言えば、たとえ誰がしようとおもしろくならなければうそではないか。

体育大会のとき、もう終わる頃だったでしょうか。後ろで好き勝手なことをしている人が予想していたよりも多かった。無茶で飛躍しすぎていくかもしれません。こんな所に文化祭のおもしろくなかった原因があるなどと大真面目に考えたりしてみたのですが。

自治会自体にも足りない事があるのではないか。よくわかりませんが、何が足りないか。的からずい分はずれているようにも思われませんが、自治会に閉鎖的な所があるように感じたことがあります。閉鎖的とまではいえないにしても、どんなことを今しているなど、周囲に働きかけることが少なくはないか。そのように思うことがあり

ます。前期の人たちにすればその様な時間も心にも余裕がない。後期の人たちにすれば、その働きかける事自体がない。そう思い、その考えはすぐに否定されてしまいます。今の状態で精一杯であるということ。それでもどこかひっかかりがあるのです。少し真面目すぎるのではないか、考えすぎているのではないかと思うのです。いつもでは困りますが、少しふざけてみることも時には必要ではないでしょうか。真面目であることは大切ではあるけれど、疲れてしまふし、後が続きにくいでしょう。

「新しく門を作る。」なんて大きなこと言った人がいました。私個人としては、おもしろいと思います。少し動機にひっかかりを感じないわけではありませんが。しかし、あれくらいの大きなこと、普通実現不可能と思えることを言い出すのもいい事だと思います。しかもいいだした人が役員でなければもっとおもしろくなるのではないか。本当にその様な事が続出したらどうするのかと叱られそうではあります。

結局、なんだかんだと言っても各自の自覚という問題におちついてしまうわけです。ありきたりでわかりきったことにおちついてしまふ。各自の問題。私自身のことを考えれば、全くなっていない。わかりきってはいるのですが。思うようにならない。ままならぬのが人の常。まだ割り切ってしまう時ではないとは思いますが。

## 限 界 —— 文化祭狂騒曲 ——

前期文化部長 松浦正人

夜の気配が忍び込んでいた。定時制では、まだ授業が続いている

はずだったが、物音は全く聞こえなかった。自治会本部だけが切り離されていた。嵐が思う存分暴れ回ったあとの沈黙だった。

時刻はとうに八時を過ぎていた。数時間に渡る議論の末、得られたのは何だったのか。実行不可能を説き続けた生徒も、隙間を見つけてようとしていた先生も、今は押し黙っていた。

そんな時、とりわけやつれた先生が言った。「――無理やで。」半ば自嘲を籠めたその言葉は、しかし、皆の胸の奥にも、大なり小なりわだかまっていた。

これは、狂騒の文化祭当時の記憶の中でも、ひととき鮮烈に残っている一つの場面だ。議論に議論を重ねて創り上げていった文化祭を象徴するものだからである。学校の門を出るのが七時を過ぎ、一方で、朝七時半には門をくぐる――家は寝る所と冗談めかした、あの日々のことを。

今回の文化祭は、例年以上に問題が山積みしていた。例えば、第一日の一部。体育館建設の工事で、多くの通路が閉鎖されたり、陸橋となったりして、校外からの訪問者の数によっては、非常な混乱に陥る危険性があった。また二部では、運動場の縮小に伴って、生徒の集合状態をどうするか、フォークダンスをどうやって行うかなどが問題となり、更に第二日では、各クラブの演技希望時間の申請が増加したうえに、参加クラブ数も増えて、プログラムに収まりきれなくなっただけが挙げられる。これらをすべて全員で討議していたのでは堂々巡りになって埒があかない。そこで、大きな担当を幾つか決め、責任を分担して準備を進めた。僕自身、第二日の担当だったのだが、独りで考えねばならなかったことでやる気が起

り、多くの人と意見を交換する手間も省けて、仕事がかどったのではないかと思う。そう、ここで僕のやってきたらしいことを、できるだけ客観的に辿ってみることにしよう。

四十分削れ。これが彼に課せられた使命だった。文化祭第二日。去年のプログラムから算出された総演技時間と、今年の総申請時間との溝である。初め彼は、プログラムを睨んで余分な時間を削ろうとした。だが、そうしてひねり出した案のうち幾つかは、ホールの人の勤務時間の関係で、また幾つかは、進行上欠かせない余裕を残すために駄目になった。残ったものでは、到底溝は埋まらなかった。冷たい現実だった。彼も諦めた。申請から削るしかない。こうなるのは判っていた。小手先の細工で四十分もの時間が浮くはずもない。にもかかわらず、彼は、権力に頼らざるを得ないその作業を避けていた。何人もの人が、「このクラブ、取り過ぎやで。」と言い、その通りと頷きながらも、ためらいが残った。現実から目を背け、できもしないのに、「時間の間隙を縫っていこう。」と好きな探偵小説の主人公気取りで、不可能に立ち向かってみせた。無理だという言葉ばかりを口にしていった。だが、今やそのポーズは完全に打ち砕かれてしまった。漸く彼の目は現実に向かい、どこが削ってくれるかと考え始めたのであった。

辛い作業だった。半年もの練習の成果である。同情は禁じ得なかった。とは言え、二日目全体が失敗に終わっては、双方が後悔する。当日のため、ここで苦い思いをしておこうと思った。それは、堅い決心だった。それから、各代表を呼んでは、「時間を――。」と頼む毎日が続いた。なかなかうまくいかない。少々削ればしても、余り



に四十分は大きかった。越ゆべからざる障壁だった。ただでさえ瘦せた彼の頬から更に肉が落ちたのは、その頃だったかもしれない。不思議に疲れは感じなかった。友人にそのことを指摘されても、「そうか？」と不思議そうに言うだけだった。

そんな彼の様子に同情したのか、先生の「説得」が効いたのか、徐々にはあるが、光明が見えてきた。焼石に水、と思っていた五分の削除が次第に力を發揮しだったのである。塵も積もれば山となる、そんな古い諺を、彼は今更のように思いだした。三十分、二十分……はみだしていた時間は減っていった。そしてついに、溝を埋めることに成功した。あとはプログラムを組むことだが、既に、時間のやりくりや演技の進行上、こうするしかないという骨組みはあるから、各クラブに打診して、少し修正すればよからう。峠は越えた——そう彼は思った。

今になって僕は思うことがある。僕が第二日担当であったとはいえ、交渉など多くの面は先生がやっていた。いろいろ考えはしたが、大半は役に立たず、朝早く来ても、何一つできぬうちに始業の鐘が鳴る。これらは、忙しいと自分に思い込ませることで己の無力さを自分から隠し、こんなをやっているのにと自分に弁解していたのではないかと思えてならない。文化祭を成功させたのは先生であり、他の係の友人ではなかったろうか。やり遂げたと思っただけは幻影で、僕は何の役にも立たなかったのではないか。そして、僕自身の役にも。……そんな疑問を打ち消すものを僕は持たない。永久に持てないかもしれない。確立された人間ではないから、疑問を抱き、己を振り返るのも当然なのだろう。

僕は何を言おうとしているのだろうか。それは多分こうだ。人はぎりぎりの所に追いつめられてのたうち回る時、何かを自分のものにする。この文化祭というものが、「ぎりぎり」の形容に値するかは判らない。疑わしいと言う人もいるだろう。だが、それなら、今僕の胸に残る、このずっしりと重たい存在感は何なのだ。この強い手応えは。もし、これが七転八倒して得られた「何か」であるのなら、今の僕達に経験しうる苦い、しかし、すばらしい修羅場が、あの一連の狂騒曲の一つの意味なのではあるまいか。そうである限り、たとえ貢献はできなくても、そんなことは問題ではない。これから行く先々で出会うだろう数々の修羅場で、「何か」になってくれるとしたら、それで十分なのではないだろうか。そして更に言うならば、己の能力に対する疑問という形で、現在の自分の限界を知ることが、新たな挑戦の始まりだと、そう僕は思うのである。

反省会の席上、彼はやはり、プログラムの組み方について実現困難な理想論を述べていた。皆、無理だという顔をして聞いていた。

## 自治会 私見

三年二組 中井修二

何故「自治会」に無関心なのか。自治会が頭を悩ます問題です。スプリング二十号にも小松氏と大石氏が無関心について意見を書いていますが、問題は一般生徒側だけでなく自治会側にもあるのではないのでしょうか。約二年の間自治会の裏方に参加して最近気づいたことです。最近の自治会は、はっきり言って「行事執行委員会」で

しかないと思います。確かに行事執行も自治会の役目ですが、各種の問題について積極的に活動する。と会則に記されている通り、何かを議論する。という姿勢が自治会には必要なのです。

自治会が行事執行だけにかかわっているから自治会への関心が失われていきます。行事というものは、だいたい執行パターンは決定して、少数の人間の意見だけで行える性格を持っているので、個々の生徒の意見が反映することは少ない。だから生徒は自治会よりも意見が取り上げられやすい方向へ、例えばクラブなどの方に心を持つのです。その結果どうなったでしょう。自治会無関心は言うまでもありません。その他に全体性の無視という事態が発生したのです。

さて全体性の無視とはどういう事でしょうか。例を挙げてみると全くきりがありません。文化祭にせよ体育大会にせよ、自分や自分の所属するクラス・クラブさえよければ秩序など破壊してもかまわない、自分の興味がないため団体行動に逆らって騒ぐ、挙句のほうには自治会は無能だなどと不平不満を言うようなことになってしまふのです。しかし、自治会を責めてみたところでどうにもならないのです。現在のままでは自治会は力を持ちえないのです。

ではどうすれば現状を打破出来るでしょうか。自治会本部がどう動いても現状打破は不可能だと思えます。もし打破出来る道があるとするれば生徒と自治会の両方が同時に積極性を持つ事ではないでしょうか。生徒総会や投書箱ではだめです。別個に生徒が自主的に参加する公聴会的機関を設置して積極的に議論、当面はこの問題について議論する以外に打破する道はないと思えます。と言っても一年や二年の公聴会を開いたところで改善できる訳はないと思えます。

が、その議論する姿勢というものは、いずれは活発な自治会、いや活発な高校生活をもたらすことであろうと、期待できると思えます。以上、非常に独断と偏見に満ちた文章ですが少しでも参考になれば、と思いつつ筆をおきます。

## 今の自治会について

一年四組 喜田貴美枝

私は中学三年の時、高校の自治会にあたる生徒会の書記になった。風紀や校風を少しでもなんとかしようという目的を持ってなったものの、話し合いには勝手な私語がまかり通っていた。役員になったからには、何かしたかった私は会長をさしおいて話を進めようとした。しかし、生徒会は学級内の話し合いと違って、そう易々と一人の力によって動かすことはできなかった。何の仕事もしない生徒会に絶望を感じた時、私はラジオから聞こえる一人の高校生の話に耳を傾けた。それは、高校生の主張コンクールだった。その高校生の話の内容は、自治会の会長になった時、学校への不満・先生たちの横暴さに対して弾圧にも耐え何度も話し合い、退学させられる覚悟で戦ったというものだった。これが、本当の話し合いだと思い、高校の自治会には私の理想の話し合いや活動があると希望を持った。しかし、実際に自分が高校へ入学して、自治会に触れてみると、その期待はだんだんくずれていった。

第一は、立会演説が立候補者のいないことから遅れたことだった。こんなことは他校にもあることだが、皆の関心のなさがまざまざと現われていると思う。

第二は、前期役員会の事務報告を聞いてみると、「僕は〇〇の行事をしました。」などと言うが、最低限の仕事しかやっていないようである。私が思っている理想と全く違うのである。確かに、我が校では先生たちの横暴な行動はないし、行事は生徒自身が進めるため、忙しくて他のことをやる暇がないというのわかるが学校の問題とこのはまだまだあるのではないだろうか。

第三は、皆の自治会に対する関心のなさである。説得力のない演説に私が友だちに「あの子に不信任の票いれたろかな。」というところ「そんなんやとつたら又残らなあかんやん。だれがなつてもええわ。」と言われた。このような自治会に対する無関心さは多くの人が持っていると思う。無関心であるということは、自分たちにとって自治会は重要性がないということでもある。もし、自治会が自分たちにとって影響があり重要であるのなら、関心をもつはずである。役員たちはよく「自治会は皆がつくるものですから協力して下さい。」と言うが、今自治会が何をやるうとし、何をやっているのかさえわからないのに、協力し関心を持つなんてできるはずがない。もっと自治会だよりを出すとくして積極的な行動をしてほしい。自治会自体、積極性を失っているのではないか。自治会は皆に自治の重要性を知ってもらい、関心をもってもらい、そして、皆はそれに対して協力する、それが自治会の理想的な形ではないであらうか。

もう一度、本当に自治会が私たちに必要なのかどうか、もし必要ならば重要性と対策などを根本から考え直すべきである。

今、かっこうだけの自治会は必要ではないと思う。

## 「僕たちの時代」へ向かって

後期自治会会長 中村栄和

最近、青少年の非行や自殺、校内暴力などが一つの大きな社会問題になっている。十数年前には学生運動が甚だ問題になったのであるから、どうやら、その生き方如何にかかわらず、若者には社会問題が付きものらしい。青少年の非行について言えば、僕の中学時代のある友人の学校では、多くのものが校内でタバコを吸い、先生も黙認せざるを得ない状況だそう。

一方我が校ではどうであらうか。生徒が教師に向かって暴力を振った話など聞いた事もない。その他のちっぽけな問題なども、多くて年に二、三度であらう。大手前はいたって平穩無事である。三無主義の傾向など全く見られず、生徒は明朗快活、個性と個性がぶつかり合う血の通った学校生活を送っていると思う。僕は他の高校の友人からその高校についてよく話を聞いてきたのだが、その一つ一つと照らし合わせてみると、やはり大手前は立派な学校だなあと痛感する。

だが、まだ我々は一人前ではない。少なくとも、去年の文化祭第二日目の会場であった青少年会館内での鑑賞のマナーの悪さには、同じ大手前生として情けないと思つた。

例年通りに、午後からコーラス大会決勝が行われた。幕が上がる。舞台は既に歌える状態にあった。観客の盛大な声援。指揮者の手が上がる。その時、僕の恐れていた事が起こつたのだ。観客の声援は一段と大きさを増し、いっせいに静まらないのである。指揮者は少しためらつたが、クラスの者全員を見渡すと一気に指揮棒を振り降ろ

した。確かに練習を重ねて来た作品だとは感じたものの、あの、コーラス特有の奥で脈打つ精神の躍動はなく、どこか乱れている様な気がして満足できなかった。次も、その次のクラスの時も、声援の送り方に問題を感じ、又、同じ様な印象を受けた。

僕は一昨年、この決勝大会に一年四組の一員として出場した事がある。その時、我々はトップに歌ったのだが、やはり去年と同じ様に場内はいつまでも静かにならなかった。我々は、場内が静まるまで始めない事を打ち合わせていたから、そこに空白の時間が過ぎ苛立ちを覚え始めた。精神の集中を乱され、みんな練習で鍛え上げて来た本来の力を出し切れずに終わってしまった。こういう経験を持っているから、去年トップに舞台に立った諸君の気持ちはよく分かる。いくら良い賞を受けたとしても、自分達の力を十分に発揮出来なかったという不満が残っているのはつまらないものだ。確かに大会を盛り上げようと声援を送る事は良い事だ。しかし、細かな注意を要するコーラスなどを応援するには、演技者を動揺させないようけじめをつける必要があるのではないか。相手の気持ちを察する事のできないようでは、まだまだ子供ではないか。しっかりしうぜノ

よく「大手前生の質が下がった」などと世間から言われているが、僕にしてみれば余計なお世話、たいした関心など寄せていない。ただ、人生の深淵を見つめて生きる事の意味を問い続けて行く人間、スケールの大きい人間などが少なすぎると思う。そして反対に、とても素直でちゃめっ気のある快活な人間が次第に増えてきている様に思われる。

こうした流れも、青少年の非行の悪質化などと何らかの結びつき

があるように思えてならない。では何故こんな風になってしまったのだろうか。色々な事情が複雑に絡み合っているのだろうが、少なくとも一つには、我々が「甘え」に陥っていることがあると思う。本校を例に取ってみると、先程述べたコーラス大会、次に朝礼の集合が遅い点、遅刻者が多い点などに象徴されている。

いい意味では、明るく楽しい学校生活。悪い意味では甘えの浸透したヌルマ湯状態。これが、今の大手前の現状ではないだろうか。我々の大半は大学進学を希望していると思うが、将来に対する展望や人生観世界観は、本当はとも甘いものではないだろうか。甘い考えでは人間何一つ出来はしない。本気に命がけで取り組まなくては一つ成功しえない。この普遍的真理を忘れてしまっている我々に、将来一体何が出来ようか。

有志事遂成。志あらば事ついに成ると。僕の中の三の時担任であった先生の好きな言葉だ。人に出来て自分に出来ぬ事はない。出来ないのは、その人にやる気がないか、あるいはその人が本気でしていないからだ。

今の我々に最も大切な事は、己の選んだ道を本気に、命がけで、進んで行く事であると僕は思う。



## II 青春・将来

青 春

二年十組 山崎 陽子

何年か先、暖かいこたつに入って玄米茶でも飲みながらテレビを見ていると若い頃の自分を思い出すこともあるだろう。テニスもその中の一つ。

私の青春がテニスであるなら、引退してしまった今、私の青春はもはや終わってしまったのだろうか？ そうした疑問を抱きながらも、苦しいはずの大阪城でのトレーニングがなつかしく思われ、何かもう終わってしまったような安堵感と淋しさが複雑に混じりあっている。

最も大きな出来事といえばテニスコートがつぶされたこと。つぶれると聞いた時は、遠い所のことのように思われてさして悲しくなかった。けれどさすがに無残にも掘りおこされているコートを見た時は胸がつまった。テニスシューズでしか通れないはずのコートを見たい大きな車がわがもの顔で行きまわっている。コート整備と玉拾いとミーンティングと夕暮れと太陽の輝きとが錯乱していた。数多くの思い出が、浮かんで消え、消えては浮かぶ。今、完成寸前の体育館のわきに少し赤土が残っていた。何も言えず通りすぎてしまった。こ

んな所にコートがあったことも、忘れかけていた。そんな自分が淋しかった。今の私のコートは、大阪城内の府警コートであり、淀川河川敷のコートであり、守口市民コートである。

コートがつぶれると聞いた時、誰からともなく「弱いからコートがなくなんねん。インターハイに出よう。強くなるう。」という声。そんな無言の誓いも忘れかけていた夏の日、私はコートの上を走りまわっていた。一年の頃から一方的に知っていた相手。大きな大会にも再三出ていた相手。でも不思議に負ける気がしなかった。ただ飛んでくるボールに追いついて打ち返すのみだった。走り疲れて息の切れている自分に気づく。弱気になった私を支えてくれたのは、制服のまま玉拾いをしてくれた友であった。何もかも忘れボールだけを追ってひたすら走っていた。いつの間にか勝っていた。

そして近畿大会。二回戦で負けてしまったけれど悔いはない。ここまでいけたのは、顧問の先生方、多忙な中を練習にきて下さった先輩、トレーニングの時励ましてくれたクラブの仲間、玉拾いをしてくれた後輩、ねばり強いテニスを教えてくれた友のおかげである。他のクラブの方々も、逆境に打ち勝って目標めざしががんばって下さい。

まだ私達は青春中期。この小さな世界の外側に、無限の可能性が広がっている。何事にも畏れを知らない若い力で打ち込んで行きたいと思う。



## 「青春」って何?!

二年八組 沢田 涉

「青春」ねえ……。難しい言葉ですね。この原稿を依頼されてから改めて考えてみたのだが、僕はこれほど馴染み深い、あまい言葉も少ないと思う。

さて、読者はこの言葉からどんなイメージを思い浮かべるだろう。静かな浜辺。より添って歩く恋人達。白い波が打ち寄せ、砂地を蟹が横切っていく。彼方を見やれば、水面は日の光をうけて、まるで寶石をちりばめたかのようにキラキラと光り、海鳥達は群れをなして真っ赤な太陽に溶け込んでいく。やさしい風が遠くで遊ぶ子供達の歓声を運んで来る……。

「アホか！ そんなもん青春やない!!」と怒る方、それは僕の仲間です。まわりにいるロマンチックな夢に浸る彼らに、さあ、一緒に罵声を浴びせかけましょう。(陰の声……ヒガミだ、ヒガミだ。) 他にはどうだろう……。こういうのもあるんじゃないかな。

グラウンドに響く鬼コーチの怒声。もうすっかり日は落ちて、夕闇が忍びより、ボールもほとんど見えない。けれどコーチの容赦ないノックの嵐が彼を襲う。彼は必死にボールを追う。そして勢いあまって地面に突っ伏して、苦い砂を食う。ひとりでに涙がにじんでくる。でも、彼は氣力をふりしぼり立ちあがり、力の限り、汗と涙と共に練習にあけくれる。遙かな甲子園を目指して……。

「そう、そう、それが青春の真実の姿さ」と、目を輝かせる人も少なくないでしょう。

でもねえ、僕だけについて言わせてもらえば、あまりこれもピンとこないのです。

確かに、日々厳しい練習に耐えてきた人達には、触角を刺激するような光景でしょうが、自分で言うのも何ですが、怠慢クラブの権化のように言われているクラブに籍を置く僕には、ずっと遠くに感じられるんですよ。だからね、僕と同じく、「怠慢、怠慢」とバカにされている人は、僕の所へ来て下さい、互いに慰めあいましょう。もちろん、真面目な話、他にも色々と尊い青春の姿というものはあることでしょう。

先日、某TV局で放映していた、「ああ、この愛なくば」というドラマ。泣かされましたね。主演の女優○の熱演、ガンと頭を打ちのめされた感じでした。世の中には、恵まれない環境、あるいは条件下で、私達なんか顔などまともに見れない、そばに近づく事さえ気のひける程、素晴らしい青春を送っている人達が、たくさん、たくさんいるのだという事を、深く認識すべきだという事を知らされました。

それに比べ僕達はどうでしょう。「ああ、朝から晩まで勉強、勉強、こんなの青春と違うわノ」ともったいなくも、教科書を放り出す有様。今の状態に満足してなくても、何不自由ない僕達なんだから、今やるべき事に全力を尽くす。それも地味ではあるが、その姿こそ、真の「青春」と呼べるものなんじゃないでしょうか。

かくいう私めも、読者にこんな説教めいた事がいえるような生き方をしている訳では決してないが、許していただきたいと思う。

そしてこうして、僕の下手な文章を読んだのをきっかけに、もう一度足もとを見つめ直そうという気持ちになった人が一人でも現れ

れば、筆者である僕にとっても、皆さんにとっても、これほど素晴らしい事はないと思うのです。

## 夢想するに

一年 K・N

わたしは学者になろうと思います。まず数学者になってそれから物理学者になって最後に生物学者。そう／＼三つも。女だてらに学者なんておかしかな。いえいえキューリー夫人を見なさい。女でもノーベル賞をもらったではないですか。これしか知らないけど。

わたしの将来は夢であって空想であります。才能のことまだまだわからないし、入試のことを考えると気が重くなる。だけどそんなことはささいなことだと割り切って考えると、やはり学者になりたいと思うのです。

わたしが学者に持つ印象は一言でいって『真理の探求者』というものです。いやぁカッコいい言葉だなあ。書いていてもテレてくる。

「へん／＼何が真理の探求者だ／＼」

「ふん／＼真理を食って腹がふくれるか／＼」などという者はウサギにでも食われてしまえ／＼

かのニュートンがいました。

「私を世間ではなにがしこれこれ……目の前には『真理』の大海が横たわっている。私はたまたま浜辺に打ち寄せられた美しい貝がらを見つけては喜び子供にすぎない。」

いやぁいいこといいますね。わたし曰く、

「ニュートン少年の貝がら拾いを望遠鏡でわたしはながめている。真理の大海はあまりに大きすぎて視界におさまらない。肉眼で大海を見ようと思ったが遠くてやはり見えない。それにわたしは近眼だからよけいに見えない。ニュートン少年の拾ってきた貝がらを手にとってはため息をつく乙女……。テレるなあ。」

結局、具体的には何も決めてないわけ。でもこの夢はぜひぜひ実現したいなあ。でもわたしの白衣姿を想像するに——幻滅やなあ。

しかしずいぶん支離滅裂な文章だな。言いたいことはもっとたくさんあるんだけど——もっと文学的才能があればもっと感動的な文章になるんだろうけどねぇ。

母にこのことをいうと笑って「結婚はどうするの？」と尋ねられた。「しないよ。一生、研究に捧げるの。」と言っておいた。マリーはどうしただろう——あっぴエールがいた。(もっともそれだからキューリー夫人というのだが) あれーそんな暇あったのかな？しかし愛より強き物はないとも聞くし——非常にむづかしい。

宇宙ってなんて広いんでしょうね。浪漫を感じちゃう／＼

されども二年後、ひょっとして三年後に現実の壁は重く高く彼女の前に立ちはだかるのであった。ガビン(古いな)彼女曰く、  
「トンネル効果の応用で向うへつきぬけられるはずよ／＼」

わきで玲於奈博士がしきりに首をかしげている。さらに彼女曰く、「私がここにいるのと向う側にいるのとはトポロジ的に同相だわ。だから画像fを適当にとれば……。」

横でポアンカレが笑っている。

夢は捨てたくないですね。

## 若者に告ぐ、自戒をこめて

三年三組 松井俊彦

現代の社会は不正に満ち溢れ、虚飾と偽善にみちている。たとえば公務員のカー出張、国会議員の収賄。現在の社会には理不尽なことが多すぎる。たとえば我々戦争の悲惨さを知っている者は、誰も平和を愛さないものはいないのに、一方では、その戦争の悲惨さを最もよく知っている人たちによって、軍備が拡大されようとしている。現代の社会には愛が欠落している。一体何人の人が陰で泣いていることだろう。これらのことは、人間性をむしばみ、人間を腐敗させ墮落させている。

それなのに、我々は社会に充満する不正と不合理と愛の欠落に慣れてしまっても感じず、何も考えなくなっているのではないだろうか。近代哲学の祖デカルトは、方法的懐疑によって少しでも疑いのあるものを次々と排除してゆき、「われ思う、ゆえにわれあり」という命題を疑うことのできない真理としてたてた。されば、我々

の現在における状態、即ち「何も思っていない」状態は、我々自身の存在そのものを否定することになるのではないだろうか。確かに、ある命題が真であってもその裏の命題が必ずしも真であるとは限らないとは、数学の時間に習った。だがしかし、我々を我々たらしめる最も近道な方法が、「何かを思う」ことであるということは、おのずから理解される事実であろう。

私事で恐縮だが、尊敬するある先生は次のように言われた。

「僕らの学生時分は、米ソの緊張なんかで社会全体が暗い雰囲気包まれていた。明日がどんな日になるのか全く予想がつかなかった。僕らは救世主を待とうとは思わなかった。この暗い社会を明るくできるのは、若い僕ら自身しかないという使命感に燃えていた。」

我々は現在この先生の当時とはほぼ同じ年齢に位置し、別の問題で同じような境遇に立たされている。しかし、我々はこの先生のように真剣に何かを考え、何かに取り組んでいると言えるのだろうか。

政治経済担当のS先生はこうに言われた。

「若者の怒りが炎となって、その炎が希望の光となる。」

そうなんだ。我々若者は今のこの暗い世の中で怒らなければだめなんだ。三無主義などという新語を唱えては親のスネをかじり、ぬくぬくと、そしてだからだと生きていられる時代はもうとっくに過ぎ去ってしまったんだ。目の前に広がる我々の未来は、我々自身の手で切り拓いて行かねばならないんだ。そう、希望の光を持って。さあ、無限のエネルギーを秘めた仲間たちよ、目を覚ませよう。そして今こそ我々の未来を考えよう。そして怒ろう。みんなで立ち上がった叫ぼうじゃないか。

「正義を！」「平和を！」「愛を！」



## クラブ体験記

### One for All, All for One



(ラグビー部)

森川敦彦

『五時やで、起きや』森先生のこの声でその日もラグビーメンの男の闘いが始まった。『当たれ!!』『タックル!!』『突っ込め!!』という声の飛び交う中、ぼくは楕円球を追いかけた。一度バウンドしたら、右に転がるか、左に転がるか分からない楕円球を必死に追いかけた。ぼくは普段そこに男のロマンを感じるのだが、その時はまったく感じなかった。いや寧ろその楕円球に呪いの呪文を吐き掛けたい心境だった。(フウ)しんどい。のどがからからや。何度も心の中でつぶやいた。事実、朝起きてから水を一滴も飲んでいず、口の中がねばねばしていた。短いインターバルには太陽の位置で時間を測り、あとどれくらいで練習が終わるか、そんなことばかり考えていた。そしてどうにかその日の朝の練習が終わった。

朝食を食べ、やっと唯一の心の安らぐ時間が来た。あんな苦しい合宿だったのに不思議に笑いは絶えなかった。ぼくは専ら笑わされてばかりいたが、あのクソしんどい時に人を笑かすヤツがいるのだから妙に感心してしまった。しかし、あのおかしさは今でも忘れることができない。話は変わるが、その合宿所には日記帳というか、

雑記帳というか、まあそんな物が備えてある。それには何年前の諸先輩方の書かれたものが載っていたが、ぼくはそれを読んで心を打たれ感動したり、また今年の現役が他人の名前をかたって言いたい放題を書いた物を読んで笑ったりして昼のひとときを過ごした。そして練習。何度、向こうまで走ったら倒れてしまおう、と思ったことか。向こうまで走ってはそう思い、こっちまでどってきてもはそう思ったがとうとう最後まで走った。あいつも走っている。こいつらに負けてたまるか、という気持ちと荒井先生の『男じゃないよ』がぼくを走らせたのだろう。

こうして一日が終わり、次の朝、起床前に眼が覚める。これは厭なものである。白んでいく空を見ているとそのうち廊下のきしむ音がして、ふすまが開く。『五時やで、起きや。』

永遠に続くのではないかと思われた合宿もとうとう最後の練習を迎え、終わった瞬間には、『やった!!』という喜びと『ホッ』という安心が混じった複雑な心境になった。グラウンドから合宿所への帰り道、重い体をひきずりながら、心の中で『やったノやったノ』と叫び、その夜の演芸会では皆でバカ騒ぎし、夜遅くまで語り合ったことは今でも忘れられない。

ぼくはラグビーを始めて本当によかったと思う。こんなにいい仲間―練習中は皆真剣なものなのに、練習が終わると全員集まってワイワイ、ガヤガヤ。めっちゃいいヤツら―ができて。そして、皆さんにもラグビーのよさ、ラグビーを通じての真の友情を経験し、知ってもらいたいと思います。

汗とつらさと喜びと……

(硬式テニス部)

神山 隆

折りからのブームに乗って、テニス人口は、どんどん増えているようです。そんな中で、我が硬式テニス部は、真剣に、厳しく、かつ楽しく練習を行っています。

硬式テニス部といえば、「基礎練の厳しいクラブ」として、定評があるのですが、それを知って入部したという人も多く、ファイトマン・アンド・ウーマンの集まりです。又、男女隔たりなく、正しい技術を教えるクラブで、特に女子は、得るところが大きいクラブだと思えます。しかし、悲しいことに、昔あったテニスコートは、私達の入学と同時に、新体育館の下敷きとなってしまったので、活動は、すべて学校外で、週に二日、府警のコートをお借りし、残りの日は、大阪城で恐怖の基礎練（といっても、ボールも打ちます）を行なっています。

個人の話で恐縮ですが、私は、入部当時、基礎練のうちでもランニングが苦手で、最初のうちは、距離が長くなると、二・三度と立ち止まったりしていました。しかし、練習を続けているうち、「もうだめだ。歩いてしまおうか。」と思いつきながらも走りきれないようにりました。私は、これが、このクラブに入ってしまった根性だと思っています。勉強や、他の仕事をしていて、くじけそうになった時にも、「あの練習に耐えられるだけの根性があるのなら。」と思って頑張り、乗り越えることが少なくありません。本当に、根性がつくこ

と間違いなしです。

楽しいことといって、思い浮かぶのは、夏休みの合宿です。暑い中での厳しい練習は、苦しく、時にはつらいのですが、大自然と澄みきった空気に包まれた、美しいテニスコートで、陽のあるうちはボールを追い、期間中、テニスのことだけを考えていければいいというのは最高です。そして、短い期間ではありますが、一集団として生活を共にする、そのことによって、先輩、あるいは友人とのつながりが深まり、意外な一面がのぞかれたりするのです。

このように、硬式テニス部は、人間関係を大切にしながら、技を磨き、自分を鍛えるクラブなのです。



## せいぶつ いきもの なまもの

(生物部)  
梶 浦 祐 子

寒々とした部室に一人すわっている。目の前には原稿用紙、まだ一行しか書いていない、その余白が、薄暗い部屋の中でやけに白く、余計に寒さを感じさせる。カサコソとハムスターの動く音、三匹しかない。一匹は逃げだした。主のいないかごがなんだかさびしい。残った三匹にエサを投げ

てやる。  
「えーノ 逃げたのお、どうしてよ、どこ行っ  
たの。」

我が生物部のアイドル・ハムスター君の失踪事  
件である。その日以来の部員の努力もむなしく、  
ネズミ捕りもぼかんと口をあけたまま。ときおり

エサだけが消えていく。肥満短足の彼が、ヨタヨタと走る姿がなっ  
かしい。そばの一匹を抱きあげてみる。とても温かい。生命が息づ  
いている。生きているんだなあと思う。

入部した動機はいろいろあるけれど、その一番大きなものは、な  
んと言えよいだらう、うまく言えないが、自分自身が不思議で謎  
で、神秘だったから、というところだろうか、自分が生きている、  
しゃべって、走って、見て、聞いて、記憶して、そしてそれを頭の  
中から引き出してくる―それが不思議で、当たり前のことだと言わ  
れるかもしれないけれど、知りたくて、知りたくてたまらなくなって



その端っこにでもいいから触れてみたいと思った、ということだ。  
もちろん、クラブでは、そんなに難しいことはできないが……。

話がそれってしまったので、元にもどそう。今、部室に住んでいる  
のは、前出のハムスター四匹（一匹は家出中）あと金魚やメダカや  
ミジンコ、ヒドラ、シュリンプなど。それから、興味ある人は、ア  
フリカツメガエルにお目にかかれます。（これが実に憎たらしい  
ノ）生き物が相手だから、エサやりはほとんど毎日あるけれど、あ  
とは各自で好きなテーマを見つけて実験なり、観察なり、勝手にや

ればいいということになっている。今は、冬なの  
で特に活動はしていないが、暖かくなったらヒド  
ラの再生実験でもやろうかと計画している。現在、  
三年生四人、二年生五人の九人、全員女子という  
特異な存在で、実質的に動けるのは二年だけとい  
うこともあって、なかなか活動も思うにまかせな  
いが、生き物への限らない愛をもって、がんばっ  
ている。

現代の生物学の発展はめざましいものである。物理学や化学の進  
歩により、生命現象を分子のレベルで解析するようになった。分子  
生物学とか遺伝子工学とか言われている分野である。そんなもの自  
分たちに関係ない、なんて思わないでほしい。というのは、私たち  
自身が生き物であるから、手にふれる動物も植物も皆生物なのだか  
ら、とにかく最も私たちに密接した関係の深い分野なのです。みな  
さんも一度、無限に広い生物界をのんびりと横切ってみませんか。

## よりよい新聞作りをめざして

(新聞部)

山本博子

冬の弱い日差しがさしこむ部室で、黄変した昔の大手前新聞を読んでいた。ふと目についた編集後記に、こういう文章があった。「こんなにも、お金や時間や労力がかかるのに、それでいて満足のいくものができない。誰が新聞というものなど、作り出したのだろう。」全くその通りだと、ひとりうなずいた私だった。

思えば高一の十一月頃、それまでは属していただけにすぎなかったのが、先輩からのバトンタッチで、編集を任せられるようになった。新聞ぐらい作れるだろうと高を括っていたのが間違いで、困ったなと慌てだしても、もう遅い。仕方ない、やってみるしかないということ、やり始めたものの不安だらけだった。

新聞部の一年間の活動は、活版印刷の大手前新聞を三回、ガリ版印刷の「いかづち」を二〜三回発行することだ。傍目には、暇そうなクラブに見えるようだけれども、発行日一ヶ月前ともなると、忙しすぎるぐらいだ。

一枚の新聞を作るにも、部員が勝手に原稿を書いて印刷するわけにはいかない。大手前新聞では「他校訪問」「大手前を探る」「校内ニュース」などは、訪問したり、取材をしてからでないといけない。各部員がやっとの思いで原稿を書き上げると、みんなで回し読みをして、誤字、脱字などを見つけて直し、印刷所へ出稿。このまま印刷ではなく、「校正」といって印刷前に不備なところを直す段

階を三回行なう。そして、印刷が終わり、新聞を各クラスへ配布という運びとなる。

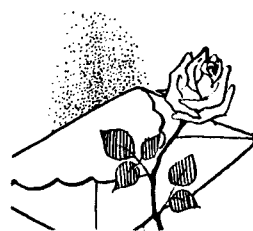
発行の度に、何らかの問題がでて窮地に立たされることが多いのだが、大変なだけにやりがいがあった時も多かった。いろんな人にインタビューをしたり、電話をかけたたり、会って話をしたり。貴重な体験をするこ

とができた。

そして、新聞が日の目を見、クラスの人が手に取って読んでくれているのを見ると、ああ、今回もできたんだ。よかった。」という思いが、こみあげてくる。

それが、次回の新聞を作るのに、励みの一つとなるのである。

もうすぐ、大手前新聞も一七〇号。伝統を受け継ぎながらも、新しい風を入れていこうと構想を練っている今日此の頃だ。



## 漫研への道

(漫画研究同好会)

平山博

「なんで無いねん！」五十四年春、二人の新入生が大手前でなげいた。その時、大手前には「漫画研究同好会」が無かったのである。ましてやクラブをや！一年生で「同好会」を設立するほど毛のはえ

た心臓をもっていなかった二人は泣きの涙であきらめたのだった。

満足いかぬ日々が流れて、一年後。大阪城の桜も満開となり、春風が校庭をなでていた。一年生のとき同じクラスだった二人も別れ別れに……。しかし、二年生になれば「同好会」を作ろうという約束は忘れなかった。六月、文化祭が終って、ますます思いはつのるばかりだった。二人は友人に声をかけ、いよいよ「同好会」設立へ向って人数を集め始めた。一番苦労したのは顧問をどの先生にたのむかだった。一人ことわられ、二人ことわられ、最後に縣先生にたのんで見ると、「他にだれもないなら、ひきうけてもいい。」とのことだった。書類を書いて浜田先生へ。まわりの友人達は「漫画の同好会なんて認めてもらえるのか。」とおどかさします。ドキドキしていると、浜田先生はニコリとほほえんで、「はい、わかりました。」この日ついに、「漫画研究同好会」が誕生した。一学期も終業式、七月十九日のことだった。

本当にいそがしかったのはこの後。夏休みに入って第一回活動。うかれたまま集まると、バラバラの活動となってしまい、まとまりがつかない。第二回、活動に参加しないもの多数。それでもめげずに会誌製作についてのうちあわせ。第三回、ほぼメンバーが決まって各自の活動へ。そして第四、第五……。二学期に入ってメンバーの変動があり、会誌製作の切りも近づき、にわかに活気を帯びる。切り日、原稿が出来てないとの声多数。かく言う僕も出来ていなかったが……。中間テストへ突入。そのあとの文化部発表会へ向けて一生懸命、漫画を書いていた人は、さぞテストがひどかったことだろう。ええ、僕の場合はこれ以上落ちようのない成績ですから、あまり変わりませんでした。

文化部発表会。なんとか出来あがった会誌やポスター、イラストなどをかざりつけて、さあ展示の開始、盛況のうちに一日を終り新聞部のインタビューに大きな口をたたき、後かたづけをして帰る。まあ成功だったなあと皆で喜ぶ。十二月二十四日、新聞部の出している大手前新聞に「漫画研究同好会」の活字を見つけて狂気乱舞。書いてあることを見てガックリ。

さて、最後に同好会の内情を書いておくと、実権は会長である平山ではなく、会計の花房さんがにぎっています。もちろん一番初めに書いた二人というのは、この二人のことです。つけくわえて書けば、松本零士は僕の一番きらいな漫画家の一人です。



## あとがき

21号ということで、クラブを表面的ではなく、もっと違う面をみてもらおうということになり、「クラブ体験記」という形で四つのクラブと一つの同好会に書いてもらいました。それぞれに、苦しさや喜びがあることをある程度わかってもらえたと思います。みなさんも一度これを機会にクラブをのぞいてみませんか。

### III 訪 問 記

笹倉邦彦

「ふれあい」を考える

―中塚五郎先生をお訪ねして―

枯れ葉の裏返って舞い飛ぶような十二月の冷たい一日、我らの恩師中塚五郎先生をお訪ねしました。中塚先生と言えば、二年生、三年生の中には、あのにっこり微笑むお口元、心やさしい走り方、忘れられない人が多くいることだと思えます。化学の御指導を受けました。現在府立香里丘高校で、教頭先生として活躍なさっています。会議室兼図書室として利用されている明るい部屋で、お話しを伺いました。窓の外では雨、遠くには竹林が見えます。

「京阪電車の中で会って、声をかけるでしょう。それだけで、顔を輝かすんやね。生徒と先生が信じあう学校。大手前のような、ふれあいのある学校にしたいね。」

ストープを囲んで、おらかな先生の声が、穏やかに聞こえます。「この学校はまだ一年生だけやからね。クラブで、例えば、ハンドボールやるにしても、先生も経験のある人が少ないし、だから、先輩もなしにものすごく苦労してやってるけど、来年再来年で、きちんと指導できる人が入ってくればはったら、随分伸びるやろうと思う。見渡したところ何もかもが、初初しい学校でした。足りない設備を

工夫して学ぶ生徒達の話には、創建時の学校を背負って立っているのだという誇りを担っているのだろうと、感じさせるものがありました。中塚先生はそんな風に、「一」から創り出してゆこうとする意欲に燃える生徒や教師の中心となって、駆け回っておられる毎日なのだろうと想像しました。

大手前のことに話しが移り、その想い出を語って下さる時、ほんとうに楽しそうな目をされる先生でした。今の仕事の時々にも勇気を湧き出させてくれるのが、大手前の生徒との心のふれあいの想い出だとおっしゃる先生。大手前卒の自分の教え子が四人もここに勤めていて、心強いとおっしゃる先生。若き日、青春、失敗。大手前にお勤めになった三十年の歴史は様々で、多くの人々の人生を見てこられ、また今でも、その人たちの心に関わっていらっしやる。ふれあいがある。それらは偏ひとへに先生のお人柄故なのでしょう。

「大手前高校」を令一度見つめ直そうという主旨で企画した恩師訪問でした。「大手前高生である前に、一人の青年である自分、何故に毎日学校へ通うのか。」まだ迷いがあるのです。問い返すことによって、きつと新鮮な問いとなるはず。「生徒とは何か、教師とは。」中塚先生は、口には出さぬ僕自身のそのような疑問にも、答えて下さっていたよう、思えます。そして大手前高校。先生は話し続けられます。

「学校全体が、がっちり団結しているようなの、求めません。でも生徒みんな、相手を尊重している。先生を尊敬してるね。十年程前の高校紛争の荒れ狂っていた時でも、大手前の生徒と先生だけは、校門封鎖や、そんなバリケードもなかったし、静かでしたね。」

「いい学校ですね。」

「ええ、でもその反面、何かうまく言えないんやけれど、いろんな意味での迫力が無いよう、思うこともありました。着実な成果は残すんやけれど、卒業後の大きな飛躍が少ない。自分で決断して、勝負を賭けるいうこと。男らしさかな。私も、長いこと考えたんやけど、これから、まだずっと培って行って欲しいですね。」

時計の音が大きく響く静かな部屋では、先生のおっしゃる一言一言が、心に染み込むのでした。「人間は抵抗、つまりレジスタンスが大切ですよ、みなさん。人間が美しくあるために抵抗の精神を忘れてはなりません。僕にはあの時、こんな、どこかで読んだ何かの一節が不思議と思いついて返されてなりません。何故か、そのまま先生のお言葉のようにも感じられたのです。レジスタンス、それは真剣なやさしさ、意志の強さのことだと思えます。それらを忘れないことだと思おうのです。そして出合いを大切にしてくくことも。僕は今日の出合いを大事にするつもりです。それがきっと「いい人、いい朝、いい学校。」と声を大にして叫べるようになることだと信じるからです。この僕の経験が、唯一人のものに止らず、中塚先生の言われるように少しでも自分たちの生活を見直してゆくことになれば幸いです。豊かな高校生活を過そうではありませんか。」

中塚先生、今日はほんとうにありがとうございました。あとで調べてみると、尊敬する作家北杜夫が、先生と同じ年の生まれでした。へどくとのマンボウよりも精神は、はるかに若い中塚先生、いつまでも生徒のことを愛し続けて下さい。



## 魔法使いの見た東高校

— 二十世紀へのパスポートを手にするために —

市立東高校は私の頭の中にあるワ。つまり私は魔法使いなのよ。「チンパイパイ、ヤブダ、ダダブダ」。呪文を唱えると、お婆様からいただいた魔法の水唱球に、望み通りのことが見えてくるの。まるでトッキー映画のように、声の出ない冷たい世界だけれど、私にはわかる。ここは、教室。明るい顔が笑っているワ。今私は、市立東高校を見ることによって、一人の高校生としての生き方なんていうのを考えなければならぬらしいの。東高校訪問記を書くことになっていった私の分身のような男の子に、無理やり頼まれてしまったの。私の分身はひどい子なのよ。手渡してくれたメモといえば、「東高校はいい学校。二年前に移転してきたばかりで新校舎は、すばらしい。L.L教室、放送室、音楽アンサンブル室。運動場は大手前の約三倍。そして生徒は現二年生が中心となって、球技大会、文化祭、体育祭に大活躍。クラブはサッカー部、女子剣道部が強い。」これだけのメモでも、ある意味で東高のりっぱな紹介になっているワ。だから初め、スプリングに載せるような名文を書くの、難しいと思ったの。でも、私は魔法使い。私には水晶球がある。さあ、のぞいてみましょう。

私は今、東高校二年生。一人の少女となる。その意識の下に潜り込むの。青いネクタイの制服がよく似合うワ。夕空に、星が光をふりまき始める頃、私は中庭で友達を待っているの。木立がこんもり

と、水銀灯が美しいワ。昼間、担任の先生がおっしゃった話を考えている私。「僕は君らに、唯学力だけを求めるんじゃない。自分の力で生きる、たくましい人間になって欲しいんだ。敷かれたレールに乗らずとも、自らの人生をつかみ取る。それが、二十一世紀に生きるパスポートだよ。」東高の先生は、とても熱心な先生ばかりなの。私達を本当に導こうとして下さる。私がぼんやりと、その長身の若い先生のことを考えていた時、うしろから友達が、ぼんと肩をたたいた。格技場の二階の体育館で、バレーボールに汗を流してきた友。楽しく語らいながら、帰りを急ぐ私達。私達のグループを呼ぶ声。見ると、向う側の歩道で、「さようなら」と手を振っている、クラスの男子達。暖かい心のふれあい。さわやかな青春。私の青春。

私は魔女。でも私には、わからない。あの女はどうして、あんなに充実していられるのかしら。毎日、同じことを繰り返しているだけなのに。学校へ来て、友達と一緒に帰ったりするだけなのに。私の水晶球はもう、力を失い始めているワ。夕日に向かって歩いていくか、夕日を浴びて真赤に輝く流れる雲に向かって、沈む太陽を背に歩いていくか、どちらが、本当は正しいのか。私は、そんなこと考えもしやしない。私は魔法使い。ただ「風に吹かれて」飛び去りゆくだけ。

今回スプリング編集部では、東高校に他高訪問を行うと決めました。筆者が東高にいる親友から、その生徒達の迫力、一面での騒しさを超えたところにある一人一人の目の輝きを聞いていたからです。それはいつしか、心の中で憧れとなり、青春の典型として感じられるようになりました。大手前高生としての自分たちの生活が、その忙しい勉強に追われて、あるいは習慣的な惰性の中で、狭い閉ざさ

れた意識の中であえていっているように感じられていったのです。その閉じた状態を打ち破るには、他の高校で同じ年代の若者がどんな活動をしているのか、どんな活動が可能なのかをより広く知っていくことが大切だと思います。そして東高校を訪れました。応対して下さった生徒会の役員の人達のはきはきと話す迫力に圧倒され、付添いの若い先生方の自信と誇りある様子には心打たれました。立派な校舎も一周り見学させていただきました。しかし、その訪問記を書く段になって、はたと当惑してしまったのです。それは文才の乏しさから外面的な報告記しか書けないことが、辛かったからというところもありますが、自分が信じていた青春や勇氣、その価値観が書いて考えるうちに全く混乱し、わからなくなってしまったのです。僕が東高から学んだものは、もっと幅の広い青春の像なのだったと今思えます。魔法使いの女の子は、その感じた混乱と、そこでは傍観者にすぎない僕自身の象徴のつもりなのですが、校舎を見学した際出会った、夕日の中庭に座っていた女の子の姿が忘れられなかったのです。そして、結局彼女は僕の中でだけの女の子なのでしょうが、その言わせている「二十世紀のパスポート」についてだけは、各人に考えてみて欲しいと思います。様々な学校で様々な形の青春がある。それは、一人一人が自らの力で切り開いてゆかねばならぬものなのだから。





## わがクラス

### 三年一組

三年一組は、適当に選挙された会長を通じて行動し、自らの行為によって、再び自習となる惨禍が起ることのないよう決意し、我がクラスの窓のすぐ近くで発せられる、工事による騒音をもともせず、ここにコーラス大会二位の賞状が存在することをもって、この紹介を書く。われらは、大手前の品位を維持し、妥協と慣れ合い、学力の低下を校内から排除しようと努めている三年生のクラスにおいて、名誉ある地位を占めたいと思う。ゆえに我がクラス員は、三年一組の天井の穴にかけ、全力をあげてこの崇高な理想（あくまで理想）と目的を達成しようとすることを誓う。（二学期からの現状はこのことに全く相反するものであったが：。）

### 第一章 先生

第一条 「先生の名・地位」高岡京子先生は、三年一組の担任であり、家庭科の教諭である。

第二条 「先生の行う組事・行為の範囲」先生は、必要と認めたところのすべての三年一組の組事に関する行為を行う。

### 第二章 クラス員の権利

第三条 「個人の尊重」すべてクラス員は、個人として尊重される。生存、自由及びユーモア追求に対するクラス員の権利については、その場のクラスの雰囲気と反しない限り、授業その他の時間において、最大の尊重を必要とする。

第四条 「発言の自由」"しらけ"をもちたすいかなる発言も、周りの者に対する被害の大きさを問わず、これを保障する。

第五条 「居住・移転の自由」何人も席替の後において、座席表記載の期限内に遅れない限り、双方の同意に基づいて、席を交換する自由を有する。

第六条 「供述の不強要」何人も、H・Rにおいて、自己の欲さない発言はこれを強要されない。

### 第三章 あとがき

以上の文章で紹介してきた三年一組の特徴は、ある程度、くじ運の悪かった作者の独断と偏見によるものであるかもしれないが、このクラスをまとめて下さった高岡先生の苦勞を暗示するものである。（どうもありがとうございました。）

注 この文章を解すには、文末を過去形に改めることを必要とする。

### 三年二組

312のアンケート（と言ってもごく簡単なものだが）を取った

ので、これをもとにして、このクラスの実態を説明しようと思う。

「312の特徴は？」という質問に対して、これは筆者も予想したことだが、「担任」と答えた者が多数いた。やはり、このクラスに担任平正人氏の影響が大きく及んでいるのは間違いない。

では、312の「象徴」とも言える担任を312の生徒達はどのように思っているのか？これは意外なことに、あまりよく思っていない者はごくわずかで、かなりの者がほめたたえていた。具体的にあげてみると、前者は「いやらしい、けち、いけず」「復讐したる」（金属バット使用不可）「相手にでけへん」、後者は「いい先生」（これは五名ほどいた）「教育に対する情熱が強いと思う」「いままどきの教師にはあまりないタイプ」「かしこいノえらいノ大手前で最高の先生!!」「内に秘めたやさしさがある」「遅刻を直してもらった」、また、どちらにも属さない意見として「もう慣れた」「不可解だ」というのがあったことを付け加えておく。

このような結果になった理由として、最近（十二月現在）両者の関係が担任の大きいなる譲歩によってうまくいっていることがあげられると思う。実際「初めは『オソロシイ』の一言、BUT最近は生徒思いの面も……」という意見もあった。筆者としては、この状態がいましばらく続くことを切に祈るものである。

この他に312の特徴として「長期にわたって席替えをしなかったおかげでクラス、特に男女間、が分裂している。」というのがあった。実際、バスケットボール大会の女子一回戦に、男子はひとりも応援に行かなかったし、女子の中には「あまりにも男子が多くておとなしいので、とうとう全員の名前を覚えられなかった」という意見を書いた者もいた。また、「クラスはまとまっているか？」とい

う質問にも、ほとんどの者が「NO」と答えていた。

それでは、どうしようもないクラスか、と言うとそうでもない。「312は住み心地がよいか？」という質問には「YES」と答えた者のほうが多かったし、バレーボール大会では総力をかけた男子6人制は準優勝した。また、一月に準々決勝以降がおこなわれるバスケットボール大会では、体力の衰えた三年らしい老練なプレーで男女とも優勝する予定である。

四月、クラス替え発表で担任の名前を見て、ショックを受けて以来担任の絶大なる影響のもとで、なんとかやってきた312も、およそあと二ヶ月で解散である。しかし、312で一年間を過ごした者は、自分が、この大手前でひとときわ異彩を放ったクラスの一人であったことを決して忘れはしないだろう。

### 三年三組

無限に広がる宇宙の中の、その一つの星に住む何十億という人々の中から選ばれた、たった四十五人の集合に自分がその要素として含まれていたということに、私はとても新鮮でとても運命的なものを感じます。あなたは感じませんか？だってそうでしょう、昨日まで知らなくて話もできなかったこんな素敵な人たちと、今日からは朝見かけたら「おはよう」って言えるんですもの。それはきっと聖母マリア様のおみちびきなんじゃないかしら。

そんな私の素敵なクラス三年三組を紹介します。

まず担任の鈴木先生、いつもダンディな服装をしておられて、世間で言う「ナイスミドル」でも本当は「ナイスエルダリー」かな。日頃の授業は微笑に満ちて進められ、私たちの弱点をカバーして下さいます。H・Rの時も息子たちが暴走しないように温かく見守って下さいます。そう、イエス様のように。

クラスの雰囲気は、何しろ男の子と女の子の比率が三対一という理系クラスですから、文系よりは四人も人数が少ないのに教室が狭く感じます。最初は男の子ばかりで怖いなあって思っていたけれど、慣れてくるとみんないい人たちばかり。でも男の子たちにとっては、女の子の少ないのはちょっぴり可哀相な気もするな。

理系のクラスということではじめは、ガリガリと鉛筆をかじって勉強ばかりするんだろうか？そうすれば私なんておいてきぼりにされちゃうんじゃないかしらってとても不安だったけど、おいてきぼりにするような非情のライセンスな人はいないし、そりゃ今は共通一次一カ月前だからみんな勉強を最優先してるけど、遊ぶ時は大いに遊ぶ、そのかわりにやる時はきちっとやると決めている人が多いみたい。授業中なんかでもわからない時には即質問がでるし、終わってからも先生によく質問に行きます。今までのクラスではちょっとなかったアクティブなクラスです。

クラスの一人一人をとってみると、平凡な人もいるけれども、とても変わったパーソナリティというか人生観を持った、いたとえば二時間目終わったら絶対早弁する人、とても秀才であるのに何か行事があると必ず「二次会しよう」という人などがいます。かく言う私もその一人。なぜって？読者のみなさんは、この文章を書いているのは女性だと思ってるでしょう。ところが実はこの「実

は」は私の口癖なんです。がー男なんです。よ川崎さん！その証拠を今お見せしよう。「ホーホケキョ」わかりましたか？

最後に私はこのクラスの美女率（全女生徒に対する美女の割合）の高さと合わせて声を大にして言いたい。「谷村聞いてるか？」ではなくて、

「誇り高き三年三組に栄光あれ！」

by トッチ

### 三年 四組

締切前日、「しゃーない、やるか」といやいやながらペンを執るクラス紹介にしては多いなあと思いつつ、字数を数える。なんと約一二〇〇字！「たまらんなあ、この追い込みの時期に。まあなんとか埋めよか。えーっと、『我が3-4は……』」

ここで紹介を続行致しますとかなりの余白がでると予想されますので、まずこの一年、昭和55年を振り返り、その後で書くことにします。ので悪しからず。

一九八〇年のホープ、いやちがったハイライト！

。社会面では……

これはなんといっても暴走族激化の問題でしょう。あれは6月頃だったか、あちこちで警察の派出所が襲われ、次にタクシー、そして挙句のには乗客の妊産婦をひきずり出してめった打ちですよ。皆さんもこの野獣的行為にはかなりの怒りをもってのことでしょう。彼らはただ、カッコ良さで物事を判断し、それを都合のいいよ

うに世間への反抗だなどと言ってるだけなんです。やがて年をとり、親のスネもかじれなくなる頃、あんたらはどないするんや、まだバイクに乗ってるんですか、or暴力団への入団 甘えるなど言いたいですね、確かに現状に対する反抗は昔にもありました。古くは勤皇の志士たち、最近では学生運動etc。この人たちは、現状より少しでも全体を良い状態にするために何らかの主張をもって反抗していたのです。けれどこの暴走族は無意味に、欲求不満者の集まりの如く、うさ晴らしに暴れているだけです。自分オンリー主義ならそれでもいいから、もうすこし先のことを考えてみなさい。一匹狼じゃあるまいし、絶対そんなことはできなくなると思うんですけど……。

。次にスポーツの話題

やはり、王の引退に尽きますね。11月4日、この日は私と同じように胸を大砲に貫かれた気持になった方も多いのではないのでしょうか。ここで皆さんは王さんが中国人であることに気づいているでしょうか。ある新聞に、王さんはお父さんから「私たちは外国人だから、憎まれてはいけません。決して腹で思ったことを全部口に出してはいけません。」と言われて育ててきて、また、王さん自身も自分の娘に「何か技術を身につけなさい。外国籍の者は普通の会社には入りにくいことがあるだろうから。」と言っていたと書かれていました。この記事は在日する外国籍の人々に対する差別問題の一面をのぞかせ、私になんとか解決の道をおもわせずにはいられません。以上、全体に昭和55年は、何か新旧の交替を思わせることが多かったというのが実感でした。

そしてもう一つの事件、我が314の誕生です。……お待たせ！我が314は遅刻と欠席においてはどのクラスにもひけはとりませ

ん。とにかく全員が朝のHRに揃ったのが10回弱。これでは先生も注意の仕様が無い。それに加えて掃除はせえへん、ここで我がクラス聖人のO氏の激怒、「かつノ」といったかは知らないが、その効き目たるや、二学期半ば頃から欠席数も減りだし掃除も真面目にするようになって何か3年らしい活気が出てきたように思えました。なぜか実力考査の英語がトップになったのもその現れかも。

バットをもつと人のかわるT33氏、お笑いマンT32氏、おっとりO氏聖人O氏、そして笑い袋のような女子の皆さん（失礼！）

皆、気のいい仲間ばかりです。

最後にこんな不可思議な45名を見放そうとはせず、いつも暖かく見守ってください。阪本先生、本当にありがとうございました。

### 三年五組

☆4月1日 担任平野先生・男子34名・女子10名・計45名により五組が産声をあげる。

☆4月8日 初顔あわせ。みんな賢そうに、おとなしそうに見えたのだけど……

☆4月25日 校外教授で吉野へ。桜には少し遅かったみたい。でもまだ咲いている木も何本かあったのです。数えている人もいたよ  
うだけど……

☆5月30日 バレーボール大会。理系の女子は校内大会になると苦しいですよ、人数がないから。その点、男子は人材豊富なのは

ずなのに……。賞状一枚ぐらい欲しかったなァ。

☆6月4日 コーラス大会予選。2位で通過。次は青少年会館の舞台の上です。

☆6月15日 文化祭クラス参加せず。見るだけというのめけっこう疲れますね。

☆6月16日 コーラス大会最優秀賞獲得。7組・10組の皆さんのおかげです。ただ一枚の賞状、今も教室に。でも、今年は全体的にレベルが低かったんだって……。

☆9月22日 体育大会。勉強がだめならせめて運動だけでも、と頑張った結果、賞状はもらえなかったけど、学年一の得点をあげる。どうして、学年ごとに順位をつけないのでしょうか？

☆10月23日 中間テストも終り、ホッと一息。高校生活最後の校外教授。秋の京都はどうでした？皆それぞれ楽しんだようですね。

☆11月15日 バスケットボール大会。男子奮闘、ベスト8進出！女子は惜敗。

☆2月25日 皆そろって仲良く卒業（のつもり）。

### 三年六組

三年六組のクラス紹介を書けと言われたのだがどう書いたらいいのだろうかと困ってしまった。そこで、十八号、十九号、二十号の三冊のspringをひっぱり出して読んでみた。すると、どここのクラスでも、「うちのクラスは変わっている、おもしろいクラスだ、

こんなクラスは他にはないだろう。」などと書かれてあった。ということは、大手前では中において自分達が変わっていると思っようなクラスは、ごく普通の一般的なクラスだと言える。すると、我が三年六組は普通のクラスではないということになるだろう。というのは、普段教室内において、ヤル気や活気、和気あいあいとしたムードなど感じられないからだ。これは担任岡田先生の影響だと思われる。こう書くとも岡田先生が、悪く思われてしまうが、そうではなく岡田先生が温厚であるのいいことに、クラス全員が、自分勝手に行動しているせいである。

例えば、遅刻・欠席の多さ、これは他のどのクラスにも負けないと断言できる。なんと全員揃った日が数える程しかないのだ。そしてクラスのまとまりのなさ。全員の行動がばらばらなのである。それから授業中も、ヤル気満々というような顔が見当たらないようだ。こういう面ばかり見ると本当にひどいクラスだったと言える。しかし、このクラスが時として不思議な力を発揮した。例えば文化祭、我がクラスは参加しないだろうと思っていた。しかし、なんと喫茶店をやるということになり、一応成功した。体育祭でも、最下位が予想されたが結局最下位を免れた。球技大会でも、他のクラスのように早朝、昼休みの練習はしなかった。にもかかわらず、バレーボール大会においても、ほとんどのチームが初戦に勝ち、しかも上位進出したチームもあるのである。そして、このまとまりのなかったクラスが、秋の校外教授・HRでのソフトボールなどではきちんとまとまっていた。このまとまりは、後期会長の性格かあるいは頼りなさに由来するものと思われる。とにかく、普段はヤル気の感じられないクラスが、いざとなると、他のクラスと同じように出来たの

である。要するに都合のいい時だけ、一生懸命になるのである。したがって大学受験においても、他のクラスぐらいの成績を残せると思うのだが、これはまだわからない。

以上、だからだとまとまりのない文章を書いてしまったが、どう紹介してよいのやら、わからなかったのてこうなってしまった。

こんなクラスではあるが、卒業となると名残り惜しいと思う者もあると思う。しかし、もう戻ることにはできない。別れ別れになってしまうのだ。最後に、一年間こんなクラスの担任として苦労された岡田先生に感謝したいと思う。

### 三年七組

ここは人気のない試験休み中の教室。文化委員のK君は、一人締切りの迫ったクラス紹介の原稿に苦しんでおります。そこへ現れたのがK君の数年来の悪友O君。

O「おう、こんな所で頭かかえて何悩んでんね。受験勉強か。ガラにもなく。」K「アホ、何言うてんねん。俺がそんな俗物どもと同じような事で悩むかい。」O「ん、ナニナニ、クラス紹介？ホヘー、お前も暇なことやっとなん。」K「すき好んでやってんのとちがうんや。こんなショーもないもん書かせやがって。大体他人に紹介する価値のあるクラスなんか存在するんかいな。例の『うちのクラスは明るく楽しく』調でしか書きようがないで。」O「まあそう言っしまえば実もふたもないが。しかしうちのクラスはあれやで。並のク

ラスよりはわりと活気があったで。」K「それは言えとるな。休み時間なんかうるさくて次の授業の予習しようと思ってもできるもんやなかった。」O「またまた、お前が一番騒いどったんやないか。」K「それに自習時間なんか雑談の花が咲いて、何度も隣近所から先生が『静かにせんか』言うてきはったもんな。」O「それそれ、なんや聞くとところによるとそれを聞いたどっかの先生が、あるクラスの授業中『お前ら騒ぐんやったら七組行ってさわげ』とか言わはったそうや。」K「ハハ、ここまできたらもう札つきやな。」O「それにHRのフルーツバスケット。あれが高校生の遊びかいな。」K「しかしあれは罰ゲームの二人羽織うどん喰いがなかなか面白かった。」O「スポーツの方はどや？」K「そら頑張るとるで。バスケットはまだ男子が残ってって新体育館落成記念大会を今や遅しと。」O「今まで、バスケットといえば大会の一回戦でおもしろい事があったやないか。」K「そうそう、忘れもしないマンモスYの相手ゴールへのプレゼントシュート！」O「その次にたて続けにゴールされて楽勝ムードが一瞬ヒヤッとしたもんな。」

そこへ白百合の如き天下の才媛♀文化委員のK女史が来る。

K女史「あんたらねー、三年だけのクラス紹介にそんなことばかり書いてたら、品位が疑われるでしょ！」K「ほなら勉強の話といいか。おいO、どや、受験勉強はかどつとるかね。」O「何自分だけエエ格好しとんね。まあ、それはともかくうちの組は年間学習予定表なるでっかい紙をはったり、小黒板に共通一次まであと何日とか書いてたり、外目にはなかなか勉強熱心そうに見えたとちゃうか。」

K「授業では生物木山先生の恐怖のウルトラ延長授業。」O「先生の情熱をヒシヒシと感じるね。K「しかし昼からの授業ともなっ

ると、徐々に襲ってくるものは……」O「睡魔」K「そう、授業中イビキかきだして起こされる奴はおるし。お、そうそう、知ってるか。Iなんか前、授業中に寝違いいよってんで。O「寝違いい」K「そーや。授業終わってからワキ腹おさえて、ア－イタタタ。」O「ほんまかいな、ムチャクチャなあ。」さっきから目をつり上げていたK女史、「またそんな話、もっと真面目なお話なのっ。」二人「といつても、ウーン……そうそう、遅刻常習の○○の話は？」K女史「やっとなんわ。」おあとがよろしいようで……。

### 三年八組

「クラス紹介を書け。」と、その重責が私に託された時、私自身、甚だ意外であった。なぜなら、私など、このような代物を書くには最も不適格だと思っていたから。そんなことは、ともかくとして、私が委任されたからには、私の思う儘ままに書くことを許して頂きたい。まず、私達のクラスのみに見えることではないかも知れぬが、目に付くことといえば、物事の処理に関して、形式的な処理をする嫌いやいがあるということだ。例えば、それは、学校行事を遂行するにあたって顕著に表れることではあるまいか。視野を広げてみれば、学校全体に就いても、そのことが当て嵌はまるまいか。自治会の役員選挙の様相をみれば、その向きは明らかだ。少し脱線したが、以上のようなことは、私達から自主性が喪失してしまったことの裏返しでもある。自主性の喪失ということを推し進めて考えれば、義務観念の

喪失ということにも到達するだろう。このことが私達のクラスに於いて顕在化しているのは、清掃に対する驚くべき無神経ぶりである。また、物事の形式的な処理ということは、ひいては、クラスという集団の形骸化をもたらしているのではなからうか。つまり、エゴイステックな人間による、単なる機能的集団になり下がっているだろうか。このようなことを私が痛切に感じるのは、私達のクラスに於けるホーム・ルームの有様を思い返す時である。どこのクラスもそうだろうが、私達のクラスでも、学期初めには、ホーム・ルームの計画が立てられた。その中には勿論、討論会や読書会が含まれていた。ところが蓋ふたを明けてみるとどうだろう。少なくとも私の感じるところでは、まともな討論会や読書会が行われたためしはないのである。確かに、何度か討論会と称して行われたものがあるが、それなど、討論会の如き名を冠するには値しない。おしゃべり会おしゃべりかいの如きものであった。社会に目を向ければ、討論の対象となるべき問題はいくらでもあったはずだ。憲法改正（悪？）問題、総選挙に於ける自民圧勝、ソ連軍のアフガン侵攻とそれに伴うモスクワ五輪不参加、米大統領選等々。挙げればきりが無いのに。これは、現代の若者の間にはびこっている政治的アパシーの反映であろうか。では、読書会を一度たりとも開くことができなかったのは、どういうわけか。先人の遺した素晴らしい足跡あとを辿ること、私達自身の在り方に就いて語り合う、僅かな時間を捻出できないことはなかったはずだ。これは、ひとえに、私達の問題意識の欠如に基づくものだろう。

このような状況を生み出しているクラス員各々の意識の方向性は如何なるものか。それは、前に述べた物事の形式的な処理というこ

とに象徴されているのではないかと思う。つまり、何事に対しても、適当な（ある意味で中途半端な）措置を施し、自己のベストを尽くすことなく、他人任せにすればいい、というような容易な意識が、私達の心の中に、巣構っているように思われる。やはり、何事も程々にという、高い理想を失った現代人からサンプリングされたのが私達か。

以上、悪い面ばかりのべつ幕無しに述べたので、我がクラスの諸君の中には、反感を持つ人が、少なくないかも知れない。が、これは、先にも書いたように、私が思う儘に書いたものである。或いは、私自身の自省的なものだったかもしれない。

### 三年九組

我が9組の一年を振り返ってみると、始業式で担任の平瀬先生を囲み、初めて顔を合わせた四十九名は、筆者を含めて多分誰もが、三年生になった事で緊張していたものと思う。だがそうしている内に、春の校外教授、バレーボール大会等々の行事を重ね、知らず知らずそれなりの連帯感が生じてきたのである。ただコーラス大会に対しては3クラス合同ということもあってか、今一步の盛り上りに欠けているのではないかと感じられたものの、本選においてよく健闘し、賞を受けたのであるから、前述のバレーボール大会の賞と合わせ9組にとって感激この上ない事であった。そしてその裏で種々の行事を支えてきた会長をはじめとする、クラスの有志達の努力も

決して忘れる事はできない。ただ、そういった行事に、四十九名という大勢のせいも、ちょっと人まかせの気風がクラスにあるのは否めないが、そんな中で女子二人の組の後期会長、副会長立候補、就任は、特筆すべきことであろう。

そしていつしか夏が去り、秋が訪れる頃には待ち受けていたように共通一次願書の出願となり、どことなく教室内にも張りつめた空気が……と、書きたかったのであるが、実際はそれ程ではなく、相も変わらぬなごやかな様子で時が流れていったのである。だがさすがに3年生だけあって、11月の声が聞こえるようになると、誰からともなくサブノートの整理や入試問題の教え合いが始まり、それが瞬く間に拡がっていき、筆者などは大勢に取り残されてあわてふためいたものである。今、9組の四十九人はそれぞれが四十九本の道のスタートラインに立っている。そして1月の共通一次試験を皮切りに受験の本番へと突入して行くのだと思うと、筆者自身はこの一年を何だか無駄に過ごしてきたような気がするが、9組はこの先、栄光を勝ちとると思う。いやきつと勝ちとるはずである。なぜならクラス全体としては少々不完全燃焼気味でも、各個人はしっかりと、完全燃焼してきたと皆が胸を張って言えると思うからである。

色々書き並べてきたが、あと何ヶ月かたつと、9組の四十九人はそれぞれ新たな世界へと旅立つことになるのである。皆が将来どんな道を進んでいるかへの興味はさて置いても、何年か先に再び9組が寄り集まることがあったならば、きつと今と同じ、居心地の良い雰囲気を作り出されるだろう。筆者はそう信じている。



### 三年十組

始業ベルが鳴って、もう我々が担任ノムリンは出欠をとり終えました。そこに到着したS君、クラブで鍛えたフットワークでなんとか席にたどり着こうとするのですが、成功率はタイガースの岡田選手に盗塁成功率よりも低い、と言いますから、まず見込はありません。いつものように見つかって、先生から独特のイントネーションで御声がかかります。(A時点)それで、仕方なくS君用特製のイタコワイ懲罰をうけに、重い足を教卓まで運ぶのです。(B時点)しかし彼は、先生のもとに達するC時点までの、Bの時点で今日の小話を考えつくという、川崎敬三氏もびっくりの芸人根性を、クラスメートに披露してくれるのです。(S君は、泣く子も笑う落語研究会のメンバーであります。)

さて、ホームルームの二〇四番教室は、体育館建設工事中もあまりうるさくなくて、食堂のいいかおりがただようなんてこともないし、さらに水道が教室の中にまで通っていたりして、勉強環境としては恵まれていた方なだけけれど、学業成績は、文系六クラスの中位ぐらい。ほめていただいた事というと、英単語の試験ぐらいのものでしたから、まあ「可」というところです。また校内行事での成績も、バレーボール大会男子九人制A優勝、コーラス大会優勝の他は、見るべきものはないので、これまた「可」です。

ところが清掃の点では、ゴミ箱が満パイというのが何日も続いても、みんな平気で、黒板消しは、それを使って黒板をふけばよけいに白くなるありさまでした。また、S君会長の十組遅刻者連盟も、

野村先生の弾圧に耐えながら、盛んに活動していました。

そういうルーズさも、裏から見れば、瑣事にとらわれない開放的なクラスカラーの反映だと言えるでしょう。三年十組というクラスからは、桃井かおりや本校の化学の岡田先生の雰囲気によく似たものが感じられるのです。「開放的」と書きましたが、それだけでは言い表せてなくて、困難にぶち当たっても、自分を見失ったりしない「いい種類の楽天性」を備えているのだ、と言っておきましょう。

こういう、物事に縛られない人々が作り出す雰囲気の中では、ロマンスの蕾が一斉に開かないわけはなく、目をおおうばかりの光景があちこちでくりひろげられます。(ああ、うらやまし。)昼休みには、よその組からも出張組が来る始末で、僕達の独身貴族への決心なんて、見事に打ち砕かれました。

結論的には、我が三年十組は、「住んで気楽なよいところ」といったキャッチフレーズがピッタリの、生活共同体だと言えるでしょう。

### 三年十一組

和気あいあい11組全体の空気を一言で、しかも如実に表そうとしますと、これに尽きると思います。私たち11組生徒は、幸か不幸か隣りあわせの組が一つもないと言う独房(大手前用語で「金魚ばかり」と申します)に編入されました。ここでは他の組との交渉がほとんどなく、実際体育は私たちだけ一クラスで行いました。また、

自習時間には、周囲に迷惑のかかる心配がありませんので、心おきなくおしゃべり等をして楽しく過ごしました。(後で大きなツケを払う破目になるのですが。)こうして、他の組に犯されることなく、独特の雰囲気私たちが11組の中に生まれました。

こうした中で、文化祭を迎えたのですが、三年生は受験があるからと言って棄権するクラスもありました。私たちクラスでも不参加の方がよいと言う人が幾人かいたのですが、最後の文化祭だからと言う熱心な意見に説得されて、参加することになりました。一日目の休憩室は、余りパツとしませんでしたが、すばらしかったのはコーラス大会です。1組と合同だったので、最初のうちは、サポートして帰る人もいて、この分だと予選も危いかなと思っていましたが、日が迫って来るにつれて皆熱心になり、全員が参加するようになりました。そしてなんと、予選を一位で通過してしまつたのです。もともと根が単純(皆さん、ゴメンナサイ。)な人々の集まりですから、こうなるともう大変です。『本番では最優秀賞をもらおう。』を合言葉に、皆一所懸命に練習しました。勉強は二の次にして昼休みに練習したり、ある時には五時過ぎまで学校に残つたこともありました。……しかし、本番では結局優秀賞に終わってしまいました。この時のみんなの残念がりよつたらありませんでした。優秀賞をもらつておいて、「残念だ。」と言うのは厚かましく聞かせるかも知れませんが、きつと最優秀賞をもらえろと思つていたのでやはり残念だつたのでしょう。その他の行事では余りパツとしませんでした。特に体育祭では総点29と言う、考えられないようなみじめな結果に終わってしまいました。それでも次の日には皆ケロッとしていました。きつと楽天家の集まりなのでしょう。

こうした11組を見てH師は、「お前さんらはぬるま湯につかつて、互いに慰め合つてるんとちゃうか。」と評されました。しかし私はそうは思いません。確かに私たちはテストの成績も3年全体が一番良くなかつたそうですし、勉強も余りしなかつたようです。ですがやらなくてはならないと感じたら、皆きつとやる事ができると私は思います。コーラス大会の予選を一番で通過したように。

二期の末に反省会を開きました。そこで皆それぞれの理想を語ってくれましたが、全員がきつとそれを実現するだろうと思いません。いやきつと実現します。そう信じて筆を置く事に致します。



## 大手前 いま・むかし

### 実験を通して見た大手前生

内本慶次郎先生

私が大手前高校に勤めるようになって、早いもので九年目を迎えるようとしています。

当時の大手前といえば、国公立大の合格者数では、大阪の三本の指に入っていたので、どんな生徒がいるのか大変興味がありました。そして、勤めてみてそのしんどさを体で感じました。しかし、生徒自身は苦痛といったようなものは、あまりもっていませんでした。思いません。クラブもやり、勉強もやるといった余裕のある生徒が多かったでしょう。

勤めて二、三年目頃から、私も実験に出るようになりました。クラブの方へも顔を出すようになり、写真部員や理研部員とも親しくなりました。遠足等にもついて行き、できるだけ多くの生徒と話すように努力したものです。四、六年目になると、実験へはほとんど出て行き、生徒と一緒にあって、あゝでもない、こうでもない意見と意見を交しながら、狭い教室を所狭しと動きまわっていました。この頃までの生徒は、実験等に興味をもって居る者が多かったように思われます。教卓実験の際にも、ほとんどの生徒が教卓の前へ集まり、熱心に見ていました。生徒実験についても、班の者全員がまとまって取り組んでいたように思います。

そして現在、理科棟の物理、化学でうす汚れた白衣を身にまと

実験の時は常に出て、口やかましく、時には懇切丁寧に教諭と共に教えています。

しかし、最近感じることは、生徒の実験に対する興味度が、年々低下して来たように思います。特にあなたやる人、私見る人がかなり目につくようになって来ました。しんどいかもしいないけれど、実験というのは理科にとっては大変重要な学習です。理論だけでなく、それを実際に自分自身で確かめ、印象付けるために、皆が積極的に取り組んでもらいたいと思います。これからの君達に期待しています。

### 事務室を訪ねて

事務室というと「連絡がありますので事務室まで。」とか諸々の証明書なんかを取りに行く他はあまりなじみがないのではないのでしょうか。ストーブのきいたあたたかい部屋で大手前について話してもらいました。

Q「初めて大手前に来て感じたことは？」

A「そうやねエ。進学校のわりにはクラブ活動が活発やったねエ。

休憩時間も教室に生徒がまばらやったし、学業との両立をしているなあと思いましたよ。」

Q「昔の生徒に比べて今の生徒はどう変わったと思いますか？」

A「あまり変化はないと思うけど、八年間あまり接触がなかったのですねエ。」

Q「私たちの年頃はどのような毎日を送られたんですか？」

A「戦時中だった。学校でも軍事教育があったしねエ。」

Q 「私たちに對する要望などあるでしょうか？」

A 「まあねエ……。他の学校に比べると全体的に問題のないように思うけど、レベルから考えるとねエ、もうちょっとしっかりしてほしいように思いますねエ。」

Q 「はあ……。他には？」

A 「この学校は教室のガラスを割るという事はあまりないんやけど、その他の公共物を大切にしてほしいという事ですね。それから定時制からの苦情やけど下校時が遅いという事です。またゴミをあまり出さないでほしいという事もありますねエ。教室のゴミを他になぜか職員室からのゴミが案外多いんですよ。」

Q 「どうもありがとうございました。」  
主に事務長さんにお聞きしたのですが、その他の人たちもいろいろと付け加えて下さって、なごやかな雰囲気だ漂う事務室でした。

## 大野さん（マスター）へのインタビュー

二期期の終業式の日、原稿の締め切り日にあわてて(?)お話をうかがいました。

Q 「新食堂ができて二年近くになりますが、前の食堂と比べての感想は？」

A 「大きさは前と同じですけど、バラックでしたしね。今のほうがもちろん仕事はしやすいですよ。自動販売機は前も置いてましたよ。」

Q 「一番うれるメニューは何ですか？」

A 「そうですね平均してますけど、うどん定食なんかがよく売れる様ですね、でもメニューは他校に比べるとずっと多いんです

よ。ふやしていくときりがありませんし……。」

Q 「マスターになるきっかけは？」

A 「親父のあと継ぎなんですよ。親父が以前マスターをしていたんですよ。」

Q 「へえ、そうなんですか。ところで話は変わりますが、生徒は昔と変わったと思いますか？」

A 「むずかしいですねエ。十九年勤めてますけど、食堂の中ではあまり変化はないんじゃないですか。」

Q 「大手前は他校と違ったイメージがあるでしょうか？」

A 「そりゃもう全然違いますよ。おとなしいし、行儀はいいし、男子の中にも、満員で座れなかったら食事を抜かすという人もいますんですよ。」

Q 「エエツ（クラスの男子を見てると信じられない……。）それじゃあ私たちに對してなにか要望はあるでしょうか？」

A 「これとってないですけど、カバンをテーブルの上にのせるのは衛生上よくないと言われたことがあるんですよ。また下校時間が遅いというのもありますかねエ。（と言われて大きい看板めいたものを三枚見せて下さいました。『弁当持ち込み禁止……』『早く下校しましょう……』など「かけても同じですからねエ。」とマスター。）本当に文句なんてないですよ。反対に生徒さんの方からあるんじゃないですか？」

Q 「今までにそんなことがありましたか？」

A 「ええ、以前値上げの際にアンケートで色々反対がありましたよ。」  
Q 「忙しいところをどうもありがとうございました。」

（文責 久保あや子）

## IV 先生紹介(フレッシュ先生に聞く)

今号の先生紹介では、55年度から本校に来られた、フレッシュな(?) 四人の先生方にお話をうかがいました。(五十音順で紹介)

聞き手・文——溝根武史

■岩井先生——ぶろふいいるアンケート

生年月日——S 32年3月20日 出身地——大阪府守口市

出身高校——大手前高校 結婚——未婚・当分予定なし

□本校で最も若く、大手前が初めての御経験である、まさにフレッシュそのものの先生です。

☆今、パズルにこつてます

——どんな御趣味をお持ちですか?

岩井 前は、切手収集と海外文通やってたんやけど、いつのまにかやめてしもてね、今は、新聞の切り抜きやね。科学関係、教育関係、投書欄なんかを切ってますね。それから、最近はおっぱらパズルやゲームやね。家では大抵忙しいけど、暇なときはあればっかしね。(インタビューの前も、先生は理研の人たちと、色々なパズルに挑戦中でした。)

☆素晴らしき師にあこがれて

——どんなきっかけで、先生を志されたんですか?

岩井 高一のときの担任の数学の先生がほんまにええ先生やあってね、授業は熱心で丁寧で、優しいけど怒る時は怒るっていう、人間的な先生やってんね。その先生に惹かれたのが理由やね。

## 岩井晴彦先生(化学)

——これから、どんな先生でありたいと思っておられますか?

岩井 やっぱ、その先生みたいに、授業がよくわかって、熱心で、生徒が気軽に接することができる先生になりたいですね。

——高校時代はどんな生徒でした?

岩井 真面目やってんけど、一風変わってみたいやったね。

——と、言いますと?

岩井 僕は普段はおとなしかってんけど、悪いことする生徒がいたりすると、おもむろに歩いて行って、ポカリとやったりね。結構、いたずらっぽかったかな。それは今でも残ってるみたいやけど。

☆覚悟しときや

——僕らから、こんなこと言うのもおかしいですけど、授業中騒がしい時、どう思われます?

岩井 (言いくそに) うーん：あのね、やっぱしね、みんなも

高校生やねんから、はじめを持って授業を受けてもらいたいね。でも、これから僕も厳しなるから、覚悟しときや。

——はあ、期待してます。

☆自己PR(先生筆)

大手前の先生の中では一番若く、今年大手前の先生となった人の中では、ただ一人の独身となるようです。どうぞよろしく?

□化学準備室へ行こう!

岩井先生のこと何もしらない、という人も多いかと思いますが、そんな人は、化学準備室へ先生と話をしに行きませんか。そうすれば、「勉強の事でも、他の雑談でも、何でも話しに来てくれたらいい



いのにね」と、おっしゃる先生に、意外な一面を発見することができるかも知れません。さあ、みんなでパズルをしに行こう！

### ◆ 桜井先生 — ぷるぷいいるアンケート

生年月日—S 25年12月25日 出身地—大阪市平野区

出身高校—天王寺高校 結婚—既婚・もう一度以上したい  
□ユーモア溢れる方ですが、その落ち着いた笑顔の中に、どこか厳しさが感じられる先生です。(一月に二世誕生！)

☆アクネス・チャン、いいでしょ？

— 先ず、御趣味を教えてください。

桜井 前は、フルート吹いたり、合唱団に入ったり…。大学時代から結婚するまで、しきりに旅行に行っていました。

— アグネス・チャンのファンということですが。

桜井 僕ね、肉付きのいいのがええねん。いいでしょ、彼女太目でしょ。だいぶ前、紅白出てライندگانスやった時、なかなか良かった。(空想する様に)まだ覚えてる。(笑)。

☆先生にきらわれてみたいやね

— 高校時代はどんな生徒でした？

桜井 うーん。真面目なつもりやったけど、ある社会の先生から見たら、ひねくれてたらしいね。質問したら、変な顔されたり、テストの点より低い評価が通知表についてたりね。

— (笑) その逆恨みで、社会の先生になったんじゃないですか？

桜井 (笑) さあ、どうですかね。まあ、言うてみれば、先生にきらわれる様な人間やから、教師になったんかも知れへんけど。

☆学ぶ喜びを伝えたい

## 桜井 洋先生 (政治・経済)

— では、どんな先生でいられたら、と思われませんか？

桜井 うん、僕の持つてる政経に、もっと関心を持ってもらえることができたなら、と思いますね。(教師を)やっけて面白いからね。

ま、それなりに厳しいけど。キザな言い方をすれば、学ぶ喜びを生徒に伝えることができる教師になりたいですね。でも、その前に僕自身ももっと喜ばなあかんねんけど。しんどいから、なかなかうまくいって行きませんね(笑)。

— 自分で先生御自身を分析されると、どんな人ですか？

桜井 うーんどうやろうね…。短気のようにやけど、楽天的やしね、何に対しても神経質でないかというところ、そうでもないみたいやし。

他人のいやがることも、ズバツと言ってしまううしね(笑)。ま、そんなとこです。

☆えっほんま？

— 本校生にどんな印象をお持ちですか？

桜井 ちょっと固いね。昔の天王寺みたい。

☆「社研」といえば、やはり…

— あの…県先生にも桜井先生のお話を伺いたいですけど…。

桜井 この人が入ると、話の質が落ちるから、やめとこ(笑)。

県 そりゃ、客観的に本質をついてるから、話の質も落ちるよ。

☆自己PR及び主張 (先生筆)

・再婚希望中(離婚未定ですが…。但し美人に限る。)

・一夫一婦制は善良の風俗に反するのではないか？

・どうして政治・経済の教師が最も権力がなく、最も貧乏なのか？

・(そして…)授業は厳しいから覚悟しておくこと。

☆最後に…「誰も書かなかった桜井先生」



「変な話が非常にもっともらしく聞こえるんですよ。」英語I先生  
「ヒッチャカメッチャカやね。顔見たらわかるやん。」地理A先生

◆ ◆ ◆  
■杉岡先生——ぶるふいいるアンケート

先年月日—S 28年5月15日 出身地—大阪府城東区浦生

出身高校—大手前高校 (3月8日結婚！春たけなわ？)

□がっしりした体の、まさに山男！という感じの先生です。  
その話し振りに、とても真面目そうな印象を受けます。

☆婚約者はロンゲヘア—？

— どんな人のファンですか？

杉岡 髪の毛の長い女性が好きやから、岩崎宏美なんかね。それから、秋吉久美子もええね。彼女、どっか変わってるやろ？何を考てるのかわからん感じで。そこがええんやね。

— 今度結婚される方も、そんな方ですか？

杉岡 (笑) いや…。何を考てるのかわからんのは困るからねえ…。見したるか？(と言いつつ、鞆から写真を取り出す)

— いつも(写真を)持ち歩いてはるんですか？

杉岡 いや…。生徒にね、見してくれて言われたんや。

— 話変わりますが、失礼ですが、相撲の、千代の富士に似てるって言われませんか？

杉岡 あっそれなあ、前の学校にいた時から言われてるねん。知らん生徒からも言われたりね。その頃から、彼のファンになってね。

☆考え方が幼稚やったんかな、昔は。

— 高校時代はどんな生徒でしたか？

杉岡 そうやね、今から考えてみると真面目やったねえ。その頃は、

杉岡 茂先生 (数学)

学生運動が盛んで、上級生らかなり活動してたみたいやけど、僕は考え方がまだ幼稚やったせいか、そんなことは、良くわかれへんかったね。ただ、何事にもガツガツせず、ゆったりと余裕を持っていたと思ってきました。

☆自主的に活動して欲しいね

— 今の大手前生に何を感じられますか？また、望まれますか？

杉岡 うーん、ちょっと授業に臨む態度ができていない子が多いね。予習して来ないのとか、指名したら文句言う子なんかね。やっぱ、勉強いうたら、自分から進んでやるのが本当やろ。人から言わ



れて、いやいややるんやったら、意味あれへんやん。僕らの(高校生の)頃やったら、少なくとも、何らかの目標に向かう気持ちで、自主的にやってたと思うんやけど。だから、授業は全員で作っていったら、と思いますね。

☆いつもは笑顔でいてるんですよ

— 生徒達から、どんな先生に見られているとお思いですか？

杉岡 (笑) そりゃわからんなあ。僕はね、授業を持ってへん生徒とやったら、わりと気軽にしゃべれるんやけどね、でも、自分の教えている子を前にすると、つい、厳しい顔してしまうんやなあ。ほんまは、授業中でも普段みたいに冗談言うて楽しくやりたいんやけど。— 責任感がお強いんですね。

杉岡 (笑) いやあ、責任感が強いっていうよりも、自分のことでは、きっちりとさせとかなあかん、と思う性格やからね。

☆自己PR (先生筆)

生徒のことを、じっくり聞いてやれる教師になりたいですね。職

員室ではいつもニコニコしてるのに、授業中はどうしても堅くなっ  
てしまう。数学の質問以外に他のことも話しに来ておくれ。

◇ ◇ ◇

■森先生——ぶろふにいるアンケート

出身高校—大手前高校 結婚—既婚 (年齢—不詳)

□お見うけしたところ、あまり先生らしくなく見える方  
ですが、話をしてみると、ますます先生らしくなく思われま  
す。近所の兄ちゃん？といった感じの優しい先生です。

☆ストーンズ・ジエネレーション？

—— ときなみな質問ですが、御趣味は何ですか？

森 まあ、音楽聴いたりねえ、ジョギングしたりやねえ。

ジョギングは、ここ5・6年やってるんやけど。

—— 音楽はどんなものを聴かれるんですか？

森 うーん、昔からよく聴いてたんいうたら、ローリング  
・ストーンズぐらいいかなあ。レッド・ツェッペリンは、この

ごろあまり聴かんし。

—— 先生、ロック聴かれるんですか。

森 そやねえ、学生時代からロックとかブルースやねえ。

☆「若い時は、生意気であつてもよい」

—— どんな理由で先生になられたんですか？

森 その時は、職業をあれこれと選ぶことなんかできへんかっ  
たからなあ。まあ、教師やったら、大学で勉強したことが生かせる  
し、試験にも通ったし、なによりも、働かなあかんかったからねえ。

—— 先生は大手前の御出身ですが、本校生に何を望まれますか？

森 あのね、「若い時は、生意気であつてもよい」って言った人

## 一雄先生 (国語)

森

が居てはるんやけど、僕もね、高校生は謙虚であつてもええんやけ  
ど、謙虚であろうとするより生意気な方がええと思うんやけどなあ。  
☆もっと発言してくれたらいいのにね

—— 最近、何かに感動したっていうことはありますか？

森 だんだん感動することは少なくなっていくねえ(笑)。年齢を重  
ねるにつれて、心が動かされるようなことが少なくなるっていうけど、  
やっぱりそないなるねえ。ハッと驚くっていうのがなくなるねえ。こ  
でも、授業やってて、僕の思いも寄らんかった答えが返ってきたと  
きなんか、うれしいっていうか、ハッとするねえ。あっそんで、「大  
手前生に望むこと」やけどね、授業中に、どんな考えたことを言  
うて欲しいね。人の話聞いてたら、やっぱり、



疑問が出て来るもんやからね。こういうこと  
がはっきりせえへん、という風に、もっと積  
極的に質問することを、いちばん望むね。

☆あんまりわからんなあ、自分の性格って

—— 自己分析されると、どんな方ですか？

森 そやね、割に楽天的な方かなあ。ヤジ馬的でもあるしねえ。

—— 好奇心が強いってことですか？

森 まあ、ちょっとね。さっきの話と矛盾するみたいやけどなあ  
(笑)。(好奇心が)強いときもあるんやろね。そんなもんなあ。

☆自己PR (先生談)

「ヤジ馬チック」ですが、「競馬チック」ではありません。

「少々ニヒル」ですが、「アヒル」ではありません。

◇ ◇ ◇

四名の先生方、どうも御協力ありがとうございました。



「僕たちの時代」―すばらしき一ページ

地球へのピクニック 谷川俊太郎詩集より

ここで一緒になわとびをしよう ここで

ここで一緒におにぎりを食べよう

ここでおまえを愛そう

おまえの眼は空の青をうつし

おまえの背中はよもぎの緑に染まるだろう

ここで一緒に星座の名前を覚えよう

ここにいてすべての遠いものを夢見よう

ここで潮干狩をしよう

あけがたの空の海から

小さなひとでをとって来よう

ここでただいまを云い続けよう

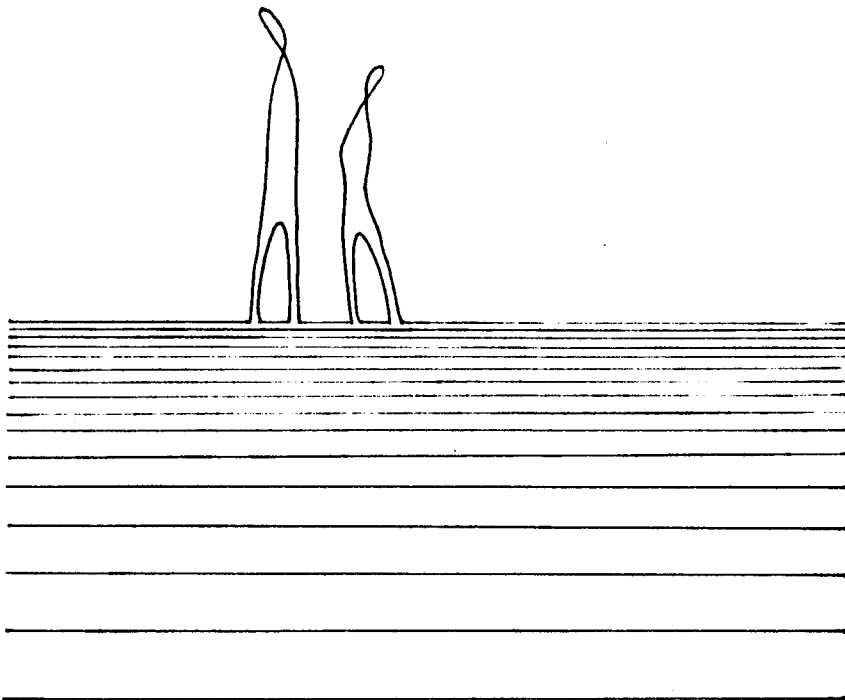
おまえがお帰りなさいを繰り返す間

ここへ何度でも帰ってこよう

ここで熱いお茶を飲もう

ここで一緒に坐ってしばらくの間

涼しい風に吹かれよう



## V 文芸 (一)

### 試験ア・ラ・カルト

富山敏郎 教頭先生

二十数年前の話だが、定時制で初めて二次試験を行なう事になり、それが四月四日に行なわれた。満開の校庭の桜を眺めて、「世間ではお花見というのに、今から採点……」とガックリ来た記憶がある。勿論採点する方も大変だろうが、受ける方も大変だったろう。

業平卿の時代には入試はなかったと思うけれど、つい

世の中にたえて試験のなかりせば 春の心はのどけからまし

今、突如として、あらゆる試験……殊に入試がなくなったら。ところが願書も出し、受験する気で居た所、直前に突如入試（ペーパーテスト）がなくなってしまう事がある。今から三十五年前のこと、昭和二十五年三月の事である。当時は戦争も末期で東京・大阪など空襲で家を焼かれて大都市の人口減、その上「学童疎開」などで都市の小学生の減。府立の中学校、女学校（旧制の。だから今の中・高校に相当。相当難しい入試があった）はいずれも、受験者が定員を下まわり、全員無試験で合格となった。当時は教育委員会制度でなく、府の学務課で扱った問題であっただろう。私学はど

うだったか知らないが、随分と感謝した人もあった事だろう。

運の良い人間はどこまでもツキのあるもの、この学年は旧中・女学校に入り、新制発足とともに、その学校のままで併設中学校と名前が変り、元の学校が新制高校になるに伴い「入試」なしで高校生だから新制大学で初めて入試体験。「大学入試で落ちる人あるのですか」なんて言った人があったとか。大らかな時代であった訳だ。これは昭和七年生まれの高校第三期生の事である。

受験を控えた三年生の諸君の中には、来年もそうならないか、などと期待する向きもあるかも知れないが、そうは問屋がおろさないだろう。昭和二十年三月といえば、戦争も末期で食うものもなく、空襲空襲で夜も眠れずの生活。ところが今じゃ食べるに事は欠かず、教室内にまでパンや牛乳のころがっている時代である。世の中上手くは行かない、平均すれば同じかな。いやいや、今の方が良い。食うもののないのはつらいもの、食えなければ死ぬが、大学は落ちても死ぬ事はない、やっぱり今の方が楽、という結論に達する。

私が高等学校を受けたのは昭和十九年三月、大げさだが、命がけの受験……と信じ込んでいた。何故なら、これに不合格になれば、その年五年生になって、陸士、海兵といった軍の学校の入試があり、全員受けざるを得ない雰囲気、合格すれば戦場に入り出され、そして戦死。こう考えると、命がけの受験ということになる訳だ。みっともなく大きな声では言えないが、その頃の最大の願いは、日く、「羊かん一人で一本」「焼きいも一人で一貫（約四キロ）」食ってから死にたい。（同窓会での会話）

又昭和二十年といえば、旧制高校の入試にペーパーテストのなかった年である。内申書だけで合否を決めたのだ。私の一年下の学年

である。当時の高校入試は、今の大学入試にも相当、或いはそれ以上の難しさがあり、又年令もほぼ同じものである。戦争末期とは言うものの、文部省も随分と思いつた事をしたものである。この学年に、最近、学士院の会員になった世界的な天文学者もいる事から見ても、入試がなくても勉強する人はするんだなあとという感が強い。

話は戻るが、昭和十五年三月、私達は旧中学を受験した。ツキのない標本のような話で、この年に限り、中・女学校の入試にペーパーテストなしで、内申書と面接のみ。府立K中学を受験したが、まゝまゝと不合格。何か書いてそして「駄目でした」なら本人もあきらめもつくが、何が悪いか判らず（そりゃあ面接が悪かったんでしょ）駄目でしたなんて、まったく馬鹿げている。母親のなげく事、なげく事。どうせ入試なんてものは、所詮選抜だから、落ちる者あり通る者ありは当然だとは思ふ。しかし取る側には取る側の論理はあるろうが、取られる側には、その試験の結果に納得させられる何物かがなければ駄目だ。従って当然とは思ふが、この制度は一年でチョン。その後高校、大学と色々な試験で落ちた経験はあるが、この時ほど馬鹿馬鹿しい感じはなかった。勿論その時合格した人は何も感じてはいないだろう。

最近大学入試を内申だけとか、面接だけとか主張する人が居るが、面接だけの入試は絶対やめて貰いたいと思っている。入試なんてものは、受ける側の論理として、より学力のある者が通り、そうでない者が不合格になるという、信念みたいなものを持っているのだから、少なくともそれを納得させるものでなくては駄目である。五分や十分面接しただけで学力があるかないか、又学問をする素質があるかないか、見抜けるものだろうか。しかし面接は人物を見るのだ

という人が居るが、これは尚一層かなわぬ。これで落ちれば、駄目な人物となる訳で学力不足より一層あわれである。

しかし、人生万事塞翁が馬で、私もその後多少は勉強するようになって、高等学校にも通ったのだから何が幸するか判らない。チャンスは何処にでもころがっているものですよ、と言いたい訳である。その転機を生かすも殺すも本人次第なんですよな。

私が高校に合格した時、先の府立K中学の校長のH先生が、「私に眼力がなかった。」とおっしゃった由を風のたよりに聞いたが、そんな眼力なんてないのが当り前で、五分やそこら見て、学力があるかないか判れば、それこそ不思議といふべきもの。いわんや入学後の学力の変化なんて判ろう筈はない。事実この制度は一年でおしまひ。当り前でしょう、高校・大学共、入学後ついて行く学力のあるかないかを判断するためのものであるなら、不合格になった者の納得しない制度は如何に強権をもってしても続かない良い証拠だろう。

今から思えばあの時代の日本は狂っていた、としか言いようがない。昭和十五年三月の中・女学校入試は先に述べた通り。ところが昭和十二、十三、十四の三年間は日本史（当時、国史と言っていた）一科目のみのペーパーテストだった。現在の高校入試を若し社会一科目（又は日本史のみ）と限ったらどうだろう。大騒動となる事だけは確かだろう。

どんな制度でも、必ず前の制度の欠陥を是正するために新制度が導入される、ところがどんな制度でも必ずデメリットが現れる、そこで又手直しされる。人間の社会はこうやって進歩（？）してきてたのだ。

以上「試験にうらみは数々ござる」という訳だけでも、今にな

ってみれば、なつかしい思い出である。入試に落ちた話等平気で話せるのも、年齢のなせるわざかとも思う。しかし、世の中に試験がすべてなければ、私なんか、のどかに勉強もあまりしなかったのではなからうか。と考えてくると、文句を言いつつも、試験のおかげで……という事にもなるようだ。

## 冬の四国周航記（レースまえ）

井手 昂 先生

『周航への憧れ』……真冬の海を、ヨットで四国一周しようと思いついたのは、52年の暮れであった。ちょうど、別府を元日に出発して、外洋まわりで淡路島の州本にいたる、日本外洋帆走協会主催のロングレースとしては珍しい、真冬のレースの募集が始まっていた。わたしたちの艇は9mのFRP外洋艇で、「スピカ」と呼ぶ。新鋭のレース艇とはいえない旧型で、「スピードに挑むヨットレースには勝ち目は一切ない。ただ、計画を立てた以上、着実に完走してゴールインしたいと思った。

その夢をかき立てたもうひとつの理由は、さらに3年前、木製の7.5m艇によって、夏休みに同じ航路を延べ14日ばかりで帆走したところにある。途中、台風で一時中断した行程ではあったが、――

愛媛県の来島海峡の複雑で激しい潮流を、船足のおそい7.5m艇で乗り切り、緊張からやっと解放されたころ、焼けつく夏日はもう夕方になっていった。松山の沖合いの釣島水道が大きく南に弧を描き、そのさきは、島影のない伊予灘が開けていた。夕焼けが海の彼方に

落ち、一面の海を茜色あかねに染めあげていた。心をひき込まれるようなひとときであった。ふと、この落ちてゆく日輪を追って西へ去っていった平家のことを想った。この海を西へ西へと追い落とされて、やがて西海の藻屑と消えた一族は、このとき、ゆっくりと沈んでゆく、自分たちの運命を暗示するような赤い大きな日輪を見ていたに違いない。やがて訪れる不安なひと夜を想いながら、同じ航路を船を操っていったに違いない――わたしは再びこのコースを走ってみたいと、そのとき心に決めていた。

『出発』……ヨットハーバーの連中は、西風の吹き荒ぶ内海すまを別府まで上ってゆく難しさが60%、豊後水道・太平洋をレース用の巨大な帆を張って追手ランニングで疾走する苦しさが30%、ゴール寸前の鳴門の鋭い吹き出しに耐える気力が10%と評した。レース指示書のように「レース艇は12月31日17時に別府ハーバー集合」のためには、27日の須磨出港では無理だろう、という意見で一致していた。

そして困ったことに「お正月はゆっくりしたい」「寒いからね」と、乗組員がひとりもいない。やっと卒業生のI君が、未経験だが乗ってくれることになり、ヨット仲間のOさんが「もし、「スピカ」が別府に着くなら、大晦日の船で、元日のスタートまでに駆けつけよう」と、暗に不可能を見透かしての約束。でもありがたかった。

27日9時。水を積み終えた「スピカ」は出発しようとしていた。「もやい綱をひけ」「隣のヨットをおせ」、I君はすべて逆の操作をしていた。突然、エンジンがストップした。スクリューにロープが巻きつき、艇は鉄杭におしつけられ、波のたびに破壊的な音を立てている。一刻も早く潜ってロープを切断しなければならぬ。わたしは急いで海水着をつけ、ナイフを持ち、デッキに立った。滝

に打たれる修験者の心境を想った。舷側からそろそろと足をつけようとして、不意に海中に滑り込み、一気に船底まで沈んだ。この海の冷たさはどうだ。一瞬、I君以外にひと気のないハーバーの冬の危険性を考えた。ひょっとして、救われないかも知れない。20分余りの作業に、骨を刺す冷たさが次第に鈍り、体温を失って沈みはじめた。棧橋への上り口は剃刀のような藤壺でびっしりだ。「おいI君、船に上げてくれ、もう駄目だ」少し引き上げ、「重くてあきませんわ」わたしは再び海中へ放り込まれた。凍え、力の失せた体は藤壺の上り口を選んだ。全身に切り傷を負い、ヨットの寝袋の中でぐったりと、かつて経験したことのない震えと挫折感に責めさなままれていた。別府までゆけるか、この体力で。「Oさん、別府ゆきは中止しました」と電話しよう。疲れ果てた頭で考えていた。「西へ」……予定を5時間も過ぎたころ、「スピカ」はもやいを解いて進路を西にとっていた。その夜更け、小豆島の灯りのない小さなハーバーに、たどり着いていた。

28日、福山市の沖合いにある白石島の漁港に着いたとき、このベースでは、とうてい31日の別府到着は不可能だと判った。その夜は強い風音を聞きながら、迷いに心を締めつけられ寝つけなかった。翌朝、4時に白石島を後にする。その日のうちに広島湾の江田島まで進めておきたかった。尾道水道を進むころ、気象は急変した。海峡や岬を渡る風は、激しく絞られ真正面から吹きつけるものだ。毒ガス島で知られる大久野島に近づくころ、海は一面真白く泡立ちなん度間切っても吹き戻される。海神の形相凄まじく、眼も開けられない状態だ。I君は恐怖感から口もきけない。「スピカ」はその海に敗れ去り、三原までおし戻されて、スゴスゴと入港した。

まだ行程の半分も進んでいないではないか。須磨へ帰るのか、さらに風に逆らって西に向うのか。その夜、ラジオから流れる「シバの女王」は、思いもよらない悲しさで胸をふるわせた。

30日の早朝3時、多島海の名の通り、潮流と入り組んだ瀬戸の暗がり、ピンと神経を張りつめながら西へ進んだ。どうしても、今日中に山口県の屋代島まで進めて、31日、別府を狙おう。ヨットの冬の西行きで、タブーとされている安芸灘の中央突破が、運のよい横風の強風に助けられて成功した。屋代島の北にある小島、沖室の漁港に入港できたのは夕暮れだった。

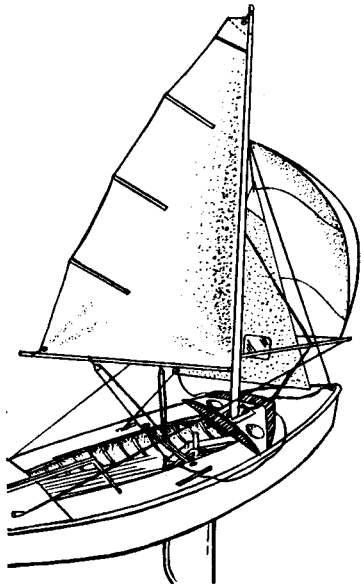
「おい、これを食べよう。うまいぞ。」一人の漁師がナマコを3匹さし出している。早速、吹きさらしの突堤でナマコの料理である。I君は、はじめて見る奇怪なナマコの、頭と尻尾を三分の一ずつ切り捨て、塩もみまでして、きれいに洗い清めている。不意に声がかかった。「あんた、うまいところを全部捨ててしまうたかさっきの人である。」

31日に、もし幸運な横風が強ければ間に合う。目覚し時計を3時に合わせて、パンパンと手を打ち、金毘羅大権現にお祈りを上げた。その夜更け、わたしは悪夢にうなされていた。ヨットが粘った藻にからんで動けないのだ。次第に傾き、横倒しになる。寝床から滑り落ちてゆく。ふと、夢から現実に返った。「スピカ」が倒れているのだ。傾いた床を滑り倒れながらデッキへとび出した。突堤が城壁のように高く黒々とそびえ立って見える。水溜りのように浅く潮の引いた泥沼の中に「スピカ」はひっくり返ってしまったのだ。別府を目前に、山口県のひなびた漁港の片すみに、孤独な姿で倒れてしまったのだ。ナマコの漁師は「深さは大丈夫」といったではないか。

漁港はまだ深い眠りから覚めないで、凍ったように静まり返っている。2時である。騒ぎにI君も船室<sup>キャビン</sup>から顔を出した。「I君、仕方がないから寝ていてくれよ」わたしは、チャートテーブルの側面に体をもたせた。ライトに照らされた傾いて動かない船室は、底冷えのする夜明け前の寒さである。「Oさん、とうとうレースには間に合いませんでした」夜が明けたら電話をしよう。

(後記)

夜明けと共に、ヘドロの海を脱出した「スピカ」は、国東半島をかわして、透明な冬の空気を通して別府の街なみを見た。入港したのは規定の10分前であった。元日の朝、船便でOさんがやってきた。乗組の多い艇で12名、少ない艇でも6名。「スピカ」はOさんと2人で舵をとり、2昼夜にわたる強風の外洋レースを完走した。暗い足摺岬の腹の底からの海鳴りは、いまでも耳から放れない。



## 大切な人との出会い

縣 喜 樹 先生

スプリング編集委員から原稿の依頼を受けた時、私は短編の恋愛小説でも書けたらなあと思いました。といひますのはさる女性との出会いを通して私にそれまで暫く冬眠していた恋心が、あたかもつくしんぼうが春の土の中から頭を出すように芽ばえてきていたからです。でも残念ながら私にそんな能力はないことがすぐに了解できましたので、以下のようなスタイルを取ることになります。それが今の私にとって一番自然な感情の発露のように思えるからでもあります。

さだまさしの「天までとどけ」という歌をご存じの人は多いかと思ひます。その中に「ふれあいのかけらが 人生を変えてゆく」とはでなく ものでもない ひとつの出会いから」という歌詞が出てきます。私はこの所が大変好きなんです。恋心というのはどうも人の心を広くするものようです。前置きはこれ位にして、彼女に語った私の高校時代のことから書いてみます。実は私の両親は共に小学校の教師として長らく勤めていました。そんな環境の中で高校一年生位まで、ただ漠然と自分の将来については何か親とは違う道を歩いてやろうと思っていたのです。でも知らず知らずのうちに考えは変わっていました。ではどうして高校の教師を選んだかといひますと、これには少し訳があります。

私はみんなと違って公立高校の入試に失敗した経験の持ち主として、併願していたある私立男子校に入りました。そこで初めて男子ばかりという生活環境の中に身を置いた訳ですが、これだけでどう

も私とその学校に馴れなかつたことは、今の私を少しでも知っている人にとってはすぐに分かってもらえると確信しています。(スケート講習を思い出すだけでも充分かな)やはり学校という所は社会の縮図でもある訳で、男子のみの学校というのはどこか不自然なんです。ですからみんなは共学の学校へ入れただけでも幸せだと思います。そんな中で今から思っても高校時代の楽しい思い出がほとんどないので。これも私の信念ですが、やはり学校という所は楽しい場ではなれないと思います。何もいわゆる勉強がどうのこうのという狭い意味ではもちろんありません。当時の私は何事にもあまり積極的には打ち込めず、クラブ活動をやるでもなく、帰路どこかで友達とたむろするでもありませんでした。(このことは喫茶店に一度も入ったことがないという例を出すだけで充分でしょう。信じてもらえないかもしれませんが事実は小説より奇なりです)

この辺まで書いてくるとみんなには私がどうして高校の教師を選んだか少し分かってきたのではないかと思います。高校時代をもう一度やり直してみたかったです。要するに私は自分の青春時代を取り戻したかった(ちょっと表現が正確かな)という贅沢な考えを強烈に持つようになりました。という訳でそれを少しは適えられるのが教師になって公立高校にもぐり込むことだったのです。ここまで書いてきて誤解があつてはいけないので言いますが、単に男子校というだけではなく、大手前高校であるような行事が、当時の私の学校では、遠足や体育祭を除いては、まったくといっていいほどなかったのです。生徒と教師の交流というのも希薄でした。これで私が何故行事の度にハッスルするかおわかり頂けたのではないでしょうか。

話は変わりますが、自分の将来のことについて私はあまり両親から口をはさまれませんでした。「やりたいことをやりなさい」ということでしょうか。ただ父親から一度こんなことを言われたのを今でも覚えています。多分高校の時だったと思います。それは「将来どんな仕事でもよいから世間体に関われることなく自分の信じた道を歩きなさい。そしてその道で人から後ろ指をさされるようなことではなく重んじられる人間にならんとだめだ」と。多分その言葉を今でもおもはゆく感じているからだろうと思います。みんなもいやおうなく進路の問題にぶちあたるとありますが、(どうやらこの文章はどうしてもこの問題にいきつくようです)ここでもうひとつ。今度以前述のさる女性が私にした話のほうに移ります。彼女が私に出した希望は結婚しても今の仕事をできるだけ続けたいということでした。(ちなみに彼女は中学校の教師です)それについて私は諸手をあげて賛成しました。今の日本のような社会の中で、女性が結婚後も仕事を持つことは大変なことですが、これも私の持論のひとつとして聞いて下さい。人間というのはできるだけ多くの世界を持つたほうがいいと思います。これは社会でも同じことで、多元化された社会のほうが健全だと思ふのです。もちろん経済的な問題も大いにあります。世間一般で共稼ぎが進行している現実をみればよくわかるでしょう。もう少し格好を付けていえば男女を問わず人間は一人一人自立していかないといけないと思います。女性の社会参加は人類の発展にとっても大事なことでないでしょうか。かつてのウーマンリブの運動の持っていた弱さは女性の解放しかみえていなかったところにあるのではないかと思うのですが、大切なのは女性の社会参加が男性の解放にもつながるといふ視点ではないかと私には思

えるのです。特にこんなことを強調するのは、今の大手前の女生徒には、言葉は悪いですが、何か結婚して家庭に入ることに逃げ道を見つけておこうというような気配が少しあるような気がしなくてもないからです。もちろん主婦業というのはそれで立派な職業だと思っ  
のですが。

ちょっとお説教みたいなことになってしまったのでこのあたりでやめにします。最後に最近モラトリウム人間ということがよく言われますが、執行猶予といいますかとにかく大切なことの意志決定が下せずあとに延ばす人間。平たくいえばいつまでも大人になれない、いやなりたくない人間が増加しているようです。これも複雑な社会の反映だと思うのですが、考えてみれば私も今までそんな人間だったような気がします。例えばどうして大学へ行ったのかと問われれば高校を卒業してすぐに実社会に入るのがこわかったとしか答えられないような面があるし、何故教師になったかと言われればやはりどこかに教育界というのは社会の荒波をまともにかぶらなくても済むからみたいな感じがしないでもないのです。そんな訳でこれからまだまだ私の青春時代が続きそうな気がします。以前は結婚までが私の青春だと何となく思っていました。モラトリウム状態からぬけ出せないその点ではみんなと同じ基盤の上に立っているように思えてしかたないのです。ちなみに私達は今度結婚することになりました。

## 一つのレクイエム

浜田 一郎 先生

大作家とはいえないが、サロイヤンという作家は私の大好きな作家の一人である。ウィリアム・サロイヤンは、昭和初期に始まった世界不況の時代に、カリフォルニア州で青年期を過ごした、アルメニヤ系の作家であって、文芸辞典では、貧しさと飢えと不安の中を生き抜く喜びを表現している、という言葉で、彼の作風を説明していることが多い。多くの人々が、富と満腹と安心に浸って生きる事が出来る現代の日本では、彼の言う「It is better to be poor and alive than to be rich and dead.」という言葉は、あまり受け入れられないかもしれない。しかし、四十年代・五十代の日本人は、敗戦の困難を生き抜いて来た体験を通して、この言葉の中の *alive* と *dead* の意味することの重要さに気付いているのではないだろうか。戦後の混乱の時代に、私をサロイヤンの世界に導き、貴重な励ましを与えてくれた一人のアメリカ軍人にまつわる思い出を、述べてみたいと思う。

P中尉は、アメリカ北東部バーモント州出身、私が知り合った、終戦一年目の秋で二十六才、5フィート・10インチというから、背丈は中程度、年令より老けた感じの面長の顔の中で、ひき締った口元と、きらりと光る大きな目が印象的な軍人であった。続々と復員して来る法・文・経の学生で、大学も暇を取り戻した秋の日の午後、ゼミナールの主任教授の言付けを受けて、私は接収中の明治生命ビルに学術雑誌を返却しに行ったことがある。用件をすませた後



将校用食堂<sup>メス</sup>でコーヒーをこ馳走になっていると、同席している一人の若い将校が、何枚ものレコードを大切そうに持っている。思わず何の曲かと訊ねた私に、彼が見せてくれたのは、粗末な紙袋に入った軍隊用レコードで、ラベルには大きくVディスクと印刷されていた。大部分はジャズ曲だったが、数枚のバッハが混っていたので、すっかり驚いてしまった。私の下手な英語でも、同好の士と違って、舌が滑らかに廻ったのだろう、忽ち意気投合することが出来た。その相手がP中尉であった。私が下宿していた叔母の家に近い中野まで送ってもらう積りが、途中でどうしてもレコードを聴いて見たくなり、冒険心を振り起して、キャンプ立川まで行ってしまった。キャンプ内のクラブで、聴かせてもらった音の美しさは、今でも耳に残っている。スクラッチノイズが殆んど無く、音溝が極めて細く、両面で十五分以上入っていた。拇指ほどのピックアップが盤面におけると、サキソフォンやトランペットが鮮やかに鳴り響く。暫らくして、彼が「これからはバッハ」と宣言して、ピックアップをおろすと、誰もいないホールに、チェンバロの生々しい響きが溢れた。彼と並んで深い椅子に腰かけて聴き入っていた私は、時の経過を忘れるばかりであった。終ると、あたりは暗く、冷気が立ち込めていた。電車で帰る私をジープで駅まで送って、「残りを聴きたければ、また来たまえ」と言って、P中尉は一冊のペーパーバックを取り出し、その表紙の裏側に次の約束の日をかき込んで、私に手渡した。

この一冊が、サロイヤンの「我が名はアラム」であった。この短編小説集を、私はその後、何度読んだことだろう。遥かにシュラネバダの山脈を望むフレスノ近辺に住むアルメニヤ移民達の生活を描いた、平易な口語調の文章は、声を出して話しかけるように朗読すると、一そう理解できることに気付いた。私のクラスの、音楽<sup>ムジク</sup>フィロゾロイの中央線グループは、その頃は中野北口の音楽喫茶「クラシック」に通っていた。闇市場の真ん中の、焼け残った一角にあるその店の、周囲の壁を埋めるレコードの中でも、バッハの曲は数少なく、オペラは精々十曲位しかなかった。LP時代の始まりは十年後のことである。私がしばしばバッハをレクエストの紙にかくのを見て、友人の一人は「バッハに入りこんだら、抜け出せなくなるよ」と冷やかすのだった。

その年の冬は厳しかった。飢えと寒さの中で、日本人は互いに寄り添って、じっと耐えているようだった。私は月に一回は、P中尉を訪ねて、ブラームスやバッハを聴かしてもらった。一度、彼がホールにあるピアノでワルトシュタインを見事に弾くのを見て、驚嘆してしまったことがある。彼はウェストポインターで、いわばエリート軍人である。時々、はっと思う程、近寄り難い威厳を見せるのも尤もと思った。母方の祖父が軍人だったので、ウェストポインターを選んだとのこと、またパーモントが、南北戦争のとき、男子人口に対する戦死者数の比率が、北軍側で最高であった愛国心の強い土地であることを誇らしげに語っていた。私の英語が通じなくて、俯いてしまうと、*not fluent but very correct*と言っていて励まし、努力して判り易い英語で表現しようと苦心しているのが感じられた。

クリスマスに近いある日、叔母の家まで送ってもらったことがある。別れ際に、突然両手に一杯の紙袋の包みかずしりと玄関先に置いて、照れた表情で弁解するように「クリスマスプレゼント」と言っていて立ち去った。海軍軍医をしていた叔父が病死してから、当

学生の息子をかかえて、インフレと苦闘していた叔母にとって、その年の瀬の食卓は、色とりどりの罐詰にハム、思わず涙の出そうな白いパンで賑わった。しかし私は感謝の心の底から、敗戦国民の惨めさが身にしむ思いで複雑であった。最近よく「豊かさの中の貧困」と言われるが、当時彼は勝利者として「貧困の中の豊かさ」という立場にあることに気付いたのかもしれない。併し、彼が私達に食物を贈る際に見せた心遣いを思い出すと、胸の中が熱くなる。

年が明けても、P中尉との交友は続いた。「人間喜劇」という小説の評判は彼から聞いていたが、結局入手出来なかったようだった。彼によれば、サロイヤンは舞台を見なければ真価がわからぬとの事であったが、当時の日本では上演は覚束なかっただろう。暖かい日を選んで、私達は鎌倉を訪れ、また熱海までドライブを楽しんだ。

三月になると米軍の移動が始まった。そして遂に、彼が日本を離れる日が来てしまった。最後に彼を訪ねた日のキャンプはジープやウェポン車の出入りで騒然としていた。私は叔母からことづかった染付の皿を入れた木箱を手渡すことは出来たが、予め準備していた挨拶は声に出すのが精一杯だった。人の出入りの繁い中で、彼が私の肩を強く押えるようにして、繰返し言った“Keep your chin up.”という言葉は、今も私の脳裏に鮮やかに刻まれている。

数年して、昭和二十六年の早春のある日、実家に帰って、風邪をこじらせて臥床していた私のもとに一枚の絵はがきが届いた。見るとP中尉の父親からのもので、通信欄には新年の挨拶につづいて、「私達の息子は北朝鮮で戦死しました」と書かれている。しばらくは言葉もなく、何うしても信じられなかった。三行足らずの簡潔な

便りを凝っと見てみると、数々の思い出が浮んで来ると共に、息子を急に奪われた親の悲しみが胸に迫って、何度も目を拭かねばならなかった。

私は思う。P中尉はどうして、敗戦国の一学生である私をあのよう激し、サロイヤンの世界に導き、音楽の美しさを教えてくれたのだろうか。サロイヤンの描くシェラネバダの山脈には、アルメニヤ人の血が懐しむカフカズの雄大な峯々が重なっていたかもしれないが、同様に中尉が親しんだサロイヤンの世界には、パーモントの緑の山々がひろがっていたに違いない。しかし私を彼に引合わせたのは運命としか考えられないのではないだろうか。

つくづく私は思う。追憶は実に哀悼の営みの中心であると。彼の雄々しい魂が、この世を去る時には、北朝鮮の厳しい寒気の中に嵐がまき起ったに相違ない。半年に満たない交友の跡を掘り起こして、綴ってみると、彼に捧げるレクイエムが出来上がった。そして、そのレクイエムを歌っていると、私自身が自分の墓碑銘の一字を刻んでいるのだというように思い至るのである。



## 花 火

岸 田 尚 子 先生

暑い夏の昼下り、めったに整理などしたことのない私が、珍しくたまった新聞を整理していました。まとめて紐でくくり、回収屋にでも出そうと思っていた私は、思いがけずも古新聞の間に、新しいきれいな紙包みを見つけたのです。(こんなところに何だろう?)といぶかりながらそっと包装紙のシールをはがしてみました。

結婚後いつの間にか五年の歳月が流れ、「岸田さん」と呼ばれるのに何ら抵抗を感じないようになっていました。学生時代親しかった友人も、相前後して殆んどが結婚し、次々に子供が生まれ、それぞれの生活に忙しく、行き来することも少なくなっていました。そしてたまに便りのある時は、きまって「誰それに赤ちゃんが生れた」というたぐいのものでした。当時私は工業高校に勤めていましたがいかつい男の先生や生徒達の中で、多少荒っぽいところもあるけど結構楽しくやっていました。でもその五年間に二度も母親になりそこねていました。一度目は結婚してすぐでしたし、まだまだ若かったので「こんなこともあるワ」と私自身も周囲の者も比較的ゆとりある心でその事実を受けとめ、次に期待をかけることが出来ました。でも二度目は「どうしてこんなことが……」と自分の不幸を嘆き、「教師という仕事がつきつずるのでは?」と思ったりもしました。私が教師をやめようかと考えたのもこの時です。学校で生徒達といふ時は忘れていても、一人になると、自分の不幸を嘆きうつうつとして過ごす、そんな毎日でした。友人のおめでたを聞いても素直に

「おめでとう」とは言えなくなりました。そんな話には耳を押え、話の輪にも入らないようになりました。気を使った友人は私と話をする時には、つとめてそういう話をしなくなりました。そんな心づかいに気がつくとかえって口惜しく、みじめで、腹が立ち、そんなことに腹を立てる自分に嫌気がさしていらしたものです。そんな日々はこのきれいな紙包みを見つけたのです。

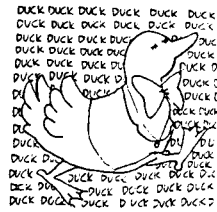
包みをそっと開けてみると、花火が出てきました。その晩帰宅した夫に「ねえ、新聞の間に花火があったけどあれどうしたの?」と尋ねてみました。彼は笑いながら「あゝ、あれ隠しておいたのに見つかってしまったか」と言って「十五日は君の誕生日だから、その時にと思っていたけど、見つかったんならしかたがないな。ちょっと待てよ、これも一緒にプレゼントしておこう。」と立ち上がり、今度はステレオの後に隠してあった小さな包みをとり出しました。大急ぎで包みを開くと小さな四角いガラス瓶に入った「シャルルの五番」が出てきました。花火と香水——どちらもギスギスした私の心にゆとりを思い出させるものでした。その晩、縁側で線香花火のしだれ柳を見ながら、私に花火と香水をプレゼントしてくれた夫の心を思い胸がいっぱいになりました。

花火に心を洗われたのか、時がそうしてくれたのか、他人様の喜びに對し、又素直に「おめでとう」と言えるようになった時、私達にも女の子が生まれました。結婚してからもう六年たっていました。

## 文芸 (二)

### Duck・Du 川を下る

二年一組 田 辺 り さ



やあ、あひるの子が行くよ。  
どこへ行くんだらう。一人ぼっちで川を下るなんて。

Duck・Du すてきなあひる。真白な羽根が、ご自慢。  
くちはしは、きんぼうげ。目がきらきら光る。

南の風にそのかされた。「海へ行こう 広い海へ  
タリエンの岬を リオをめざして。サルガッソーで  
蟹を釣りに。」

「ああ 行こう。海へ行こう。世界中を旅しよう。  
丸い世界を確かめるんだ。」  
ねずみが叫んだ。「おやまあ、とうとう気が狂った。」  
がちょうが騒ぐ。「Duck・Du の頭がおかしくなったよ。」  
牛が呟く。「春の陽射しにやられたか。」  
ろばは嘆く。「ああ なんてこと。」

「およしよ およしよ Duck・Du 海なんてこわい所。」

海なんて危ない所。それにとっても遠いんだ。」

Duck・Du こっそり農場抜け出して 川をめざして  
まっしぐら。歓声あげて飛び込んだ。きらきら 水のしぶき。  
さあ、旅が始まる。「川を下ろう 海をめざして 僕は  
Duck・Du こわいものはない。」

長い長い川の旅。でも海ほど続くはずがないから。  
川を下ろう 海をめざして。川を下ろう。川を下ろう。」

「なんて可笑しい歌でしょう。」東風が笑う。

「どうして海へ Duck・Du  
意地の悪い川かます。きつとあなたに噛みつくわ。  
町を通れば 馬鹿な人間。あなたに石を投げるでしょう。  
川。こわいものがいっぱいの川。すてきな池もこの先ないわ。」

「池なんて。かますも人もこわくない。僕は船乗りにな  
るんだから。帆を張って海を走るんだから。」

ヒュークルルル 笑い声をあげて 東風は走り去る。  
「ごきげんよう。海でまた……。」

ピューーピューーピューー ヒャホホホホ  
次に来たのは西風。荒々しい 嵐を呼ぶ風。

「ひよっこめ、そんな所で何してる。」  
「僕はあひるだ。ひよこじゃないよ。ピーター・ダックみたいに  
船に乗るんだ。」

ヒャッホッホーピューー 「何千隻も 何万隻も

俺様は船を沈めた。お前みたいな連中は みんなフカの餌。  
帰れ、帰れ、池へ帰れ、海は甘いもんじゃない。」

「誰でも最初はひよっこ。くちばしの黄色いひよっこ。

ああ ピーター・ダック マホガニーの顔をした老水夫  
海の強者その人でさえ 昔はくちばしの黄色いひよっこだった。」

ヒュー ヒュー ヒュー 西風は雨を連れて来る。

ピュウ ピュウ 激しく叩き付ける。稲妻が 空を突き刺した。  
おそろしい嵐。

Duck・Du 葦の茂みに隠れて 羽根で頭をおおう。

「ああ おかあさん。」  
ガタガタ震えて 何て哀れな Duck・Du

「お帰り お帰り お前の生まれた池へお帰り。

かあさんが待っている 楽しい静かな池へお帰り。  
ここは お前なんかの来る所じゃない。

ましてや海なんて。赤ん坊の来る所じゃない。」

嵐は通りすぎ 西風はどこかへ行ってしまった。  
太陽輝く春の午後。光を浴びて さあ 出発だ。旅を続けよう。

Duck・Du すてきなあひる。おしりをふりふり

気取って泳ぐ。

「僕は海へ行く。さあ 海へ 海へ。  
帆を上げる。もやいとけ。僕はもう赤ん坊じゃない。」

やあ、あひるの子が行くよ。

どこへ行くんだろう。一人ぼっちで川を下るなんて。

## 気体の臭い

二十年十組 楠本洋美

その昔、神は天地創造をおこなった。すなわち、一日目に天と地と光を、二日目に水を、三日目に天を裂き昼と夜を、四日目に水陸を分け植物を、五日目に水に生きるものを、六日目に空を飛ぶものと人間を含む地上の全ての動物を創った。そしてそれらのことを祝うために七日目を休日とした。

私たちは学生、だから勉強すること——もちろん適度に遊ぶことも——が仕事みたいなもの。そして世の中にはいろんな人がいて、各々がいろんな仕事をもっているというのも事実。例えば、政治家さんは大勢の前でウソをつくのが仕事だし、歌手のそれは人の前で巧く歌うことであるが……近頃は人気さえあれば、歌の上手下手は関係ないようだ。そして、科学者の仕事は探究すること——尤も、ノーベル賞と国家機密の間でウロウロすることもその一つだと聞くが——科学“というのは多くの分野に分かれた学問。この間テレビで放映された『コスモス』のように、私たちが深く興味を持つような研究もその一つ。でも、私に関心を持つのは天文に関する分野でな

く、むしろ細胞のような生物的なもの——こうなったきっかけは、何を隠そう、理科のある教科の宿題のために、いやいや読んだ本でして……。

生物の形質やなんかを次代に伝えるものを「遺伝情報」と言ううえで、その筋では花形的存在だとか。もちろん「遺伝情報」というくらいだから染色体に含まれているわけだけど、量にしてどれくらいあるのかしら？人間の場合、それをもし数字におき換えたすると五百ページの本千冊分、百科事典三十セット分くらいにはなるそうで……!?

「人間で何できてきているんだろう。」こう思ったことありませんか？科学者というのは凄いもので、アツという間——かどうかは知らないけれど——にこの疑問を説明してしまったとか。そして最終的にはタンパク質と核酸とATPという三つの、たった三つの物質がもとになって人間はおろかこの世の生物全てをつくっているという結論に達したとか。

極めて単純に考えた場合、生物を造る三つの物質をもち、遺伝情報をコントロールできれば、あとは環境さえ整えればどんな生物でも造れるという、神をも恐れぬ大偉業が成立することになる。

科学は刻々と進歩しているというけれど、どれだけの人がそれを目撃しているのだろう。一般には関係のないところでどんどん膨張しているような気がする。

密閉された部屋にたくさん箱があったとしよう。箱にはそれぞれ臭いのする気体が入っている。各箱のまわりには多勢の白衣を着た人たちがいて、その向こうには箱をながめてる人がいる。さらに向こうには箱の存在を知らない人々。白衣の人が箱を開けようと努

力している。どんな臭いの気体が出てくるのか、誰も知らない。箱が開いたらどうなるのだろう。もしそれに異臭のする気体が入ったとしたら。被害を受けるのは箱を開けた人たちだけではないから。

長い間、天敵を知らず我が世の春をほしいまにしていたホモ・サピエンスたちは、ワープ航法を可能にし、欠乏する資源を求めて宇宙へと旅立っていった。一方汚しきった地球をなおも窒息させているのは自分たちだと気づいた人類は特殊政府体制——コンピューターによる人工受精によってのみ人間の誕生が許された社会体制——時代に入る。

## 冬 陽

一年六組 中瀬 祐美

黒川はかつて一度も感じたことのないような不思議な想にとらわれてその少女を見ていた。彼女はその身体に少し不恰好なほど大きい灰色のオーバーを着こみ、ポケットに両手を突っこんで、町はずれのスケート場の前に立っていた。(中学生よりは上かもしれない。)彼は考えた。しかし、まだほんの子供のようにも思えた。黒川は女性が苦手であった。七十、八十の老人ならともかく、若い女性に対しては、うっとおしいような、照れくさいような気持ちをつも彼は持っていた。だから、若い女性が連れ立って歩いて来るのを見ると何とはなしに道をかえたりもした。また彼は無口で無愛想だったから、黒川をその歳に似合わない偏屈な画家だと、周りは言った。しかし彼は自分をそうは思わなかった。確かに人にぶっさら

棒ではあるが、それは人ざらだからではない。それが自分の性分なのだと思っていた。だがそんなことから、彼はある意味では本当に芸術家らしい人間ではあった。その黒川が今、どうしてそんなにひかれるのか、自分でもわからずに、一人の見知らぬ少女から、目をはなすことができずに立ちつくしていた。

少女は切符売りの料金表を見て、何やら考えている。「ちょっとその人、入るなら早くしてほしいんだがな。」と、いらいらした切符売りの男が邪険に言っているのが聞こえた。「滑りたいんだけどお金が足りないんだ。」少女は言った。その男言葉は妙に彼女に似合っている、と歩き出しながら黒川は思った。「なんだって、あんたふざけてんのかい。」切符売りは小窓をあけて頭を突き出し、少女をにらみつけた。

「二枚。」いきなり黒川は切符売りの前に金を差し出した。相手の男は少しむっとして彼の方を向いたが、その鋭い目にあうとぶつぶつ言いながら入場券を切った。「二枚かね？」黒川はゆっくりうなずいた。「そうだ。この子は私の連れだ。」少女は黙って彼を見上げていた。(変に思われたらどうな)と黒川は思った。(何だかってこんなことになったんだろう)黒川は少し不安になって少女をちらっと見おろした。我ながら面倒なものをしよいこんだものだ、と彼は自分にあきれた。

スケート場を出るともう夕刻だった。鉛色の雪雲が低く垂れこめている。少女は黒川に少しおくれ歩いて歩いている。(この子は一体、何者なんだろう?)そう考えた後で相手も同じようなことを思っているのだろうか、と彼は苦笑した。比処の者ではなさそうだった。北国の子供はもっと明るくてのびのびしたところがある。人みしりは

するが、すぐ都会からの客にもなつく。そしてみんな一様にリンゴのような紅い頬をしているのだ、そう黒川は思った。

「黒川です、今戻りました。」その声に奥からふとった血色のいい女がスリッパを持って出てきたが、少女を見ると頓狂な声をあげた。「まあ黒川さん、姪御さんがこちらにいらしてなんてちっとも存じませんでした。とにかくおあがりになって下さい。部屋は、もう火を入れてありますから。」どう説明したものかと困っていたから、黒川は民宿の主婦の早とちりにかえってほっとした。彼はうそをつくの、ひどく下手な男だった。

部屋に入ると黒川はコートを脱いで少女を振り返った。「ここに絵を描きに来たとき、私がいつも泊る所だから、遠慮せずにお入りなさい。」少女はきまり悪そうに立っていたが、それを聞くとこくんとうなずいた。

カーテンのすき間から分厚いガラス窓を通して、静かに休んでいる暗い湖面が見えた。少女はしばらく湖を見つめていたが、「あれ、今、魚が跳ねた。」と、黒川の方をふり向いて小さく言った。「うん。」彼は微笑んだ。少女の方から話しかけてきたことが、彼にはうれしかった。

雪が降りはじめた。黒川は、少女が、主婦の持ってきた甘酒を飲んで、妙な顔をしているのが可笑しかった。「甘酒はきらいかい。」少女は、さっき入ってきたこの家の猫を静かにながら首をふってほっ、とため息をついた。「そうじゃないんだ。ただ、その、変に思うだろうけど、初めて飲んだんだ……その、甘酒をね。」家は、遠いの?」少女は黙っていた。「夜行の、列車の切符は、もう買ったのかい。」黒川が尋ねると少女はうなずいた。「そうか。」と黒川は

つぶやいた。「何時の？」少女は目を上げて彼を見つめた。

その時、不意に黒川は、少女は比処に、死ぬつもりで来たのかも  
しれない、と思った。すくなくとも幾時間か前に、スケート場を眺  
めていた時には、彼女は確かに、死ぬつもりだったのだ、と、彼は  
感じた。(では今は？今はどうなんだろう。) 息苦しくなるような  
不安が、彼の中に拡がった。「もう、行かなくちゃいけない。」彼女  
は少し首をかしげて、黒川を見た。黒川はいきなり少女の前に立つ  
と大きく首を横にふった。

(この子は死ぬつもりなのだ、きっとそうなのだ。) それは彼の  
全くの思い違いであるかもしれない。だがしかし今、黒川はと  
にかくこの少女を暖かで安全な場所に置いておきたいと思った。少  
女は彼を見上げていた。黒川は少女の肩に手をかけると静かに抱き  
よせた。そして思いつくままに、今まで描いた絵のことを、彼は話  
し始めた。普段、無口な黒川にとって、それは骨の折れる仕事であ  
った。やがて二人は壁にもたれて座り、黒川は遂に押し黙った。雪  
は夜半に降りやんだ。(この子にひかれたのは、この子が私と同じ心  
を持っているからかもしれない)と黒川は思った。そのまま二人は  
すっかり夜が明けるまでそうして黙りこくって座っていた。ただ、  
最初の陽の光が窓からさし込んだ時、少女はその光に手をのほして  
受けとめ、生真面目な顔で、これをあげる、と、黒川  
に言った。

その朝、黒川は少女を駅のホームで見送った。通勤  
客が行った後のホームは静かで、老人が一人、日なた  
ぼっこをしながら、ベンチに腰かけている。少女は列  
車の入口に立って黒川を見ていた。やがて発車の合図



が響き扉が閉まっても、黒川は何一つ気のきいた言葉を思いつくこ  
とができなかった。彼が口をもごもごさせているのが可笑しかった  
のかもしれない。動きはじめた列車の中で少女はわずかに笑った。  
(今日は、暖かいな)と黒川は思った。

遠ざかる列車の窓が、陽の光にきらり、と反射した。

## 運命 (さだめ)

二年十組 深水 康子

N氏は、いつもこう思っていた。これから起こりうるすべてのも  
のがわかれば、と。N氏は運の悪い男であった。一番愛していた女  
が一年ほど前に死んだのだった。

それは雪の降る日であった。いつものようにその女の部屋に着い  
たN氏は、煙草がきいているのに気づいた。当然のことのように、  
N氏はその女に煙草を買いに行かせた。しかし、その女は何時間た  
っても帰ってこなかった。事故に遭ったのであった。それは、まさ  
に不運だとしかしいようなない事故だった。雪のためにスリッパし  
た車が、歩道に突っ込んだのである。その女は即死に近い状態  
だったという。N氏は思った。

(こんなことになるのだったら、買いに行かせなかったのに)

N氏にはこんな後悔がたびたびあった。いや、数えきれないほど  
あった。それらすべてのものが、あと数十分先に起こることがわか  
れば起こらない不運ばかりであった。N氏はまさに、運命に縛られ  
て生きている不運な男といってよかった。(人間の誰しもがそう感



ずるが、N氏は特にひどかった。」

ある日の昼下がりに、いつものようにN氏は公園のベンチで煙草を吹かしていた。隣に白髪の老人が座った。その老人は、N氏に話しかけるのを何度もためらった。しかし、何度かためらった後、その老人はゆっくりと話し始めた。

「こんなことを話すと、気が狂っていると思われるかもしれないが、私には、将来起こりうることを予言できる能力があります。しかも、これは一度もはずれたことがない。この能力は、他人に譲ることができる。そして、私はこの能力を譲りたい。それもあなたに。いや、嫌ならいいのです。」

と、老人は力無く言った。N氏は素晴らしいことだと思った。(今まで、運命に縛られていた自分が、反対に支配できる。)

N氏は即座に答えた。

「譲って下さい。」

「本当ですか？」

老人はN氏に、銀色のコインのようなものを手渡した。

「これからは、これを人に譲らない限りはこの能力はあなたのものです。決して、私に返してはいけません。」

勿論だとN氏は思った。

その日からN氏の人生は変わった。未来がわかるために転ぶべきところも転ばずに済んだし、痛いめにあわずに済んだ。N氏はその能力を巧みに操って、金儲けをした。急速なペースで、N氏の財産は面白いほど膨れあがった。わずか数年でN氏は、日本いや、世界きっての大金持ちとなり得た。しかし、そんな幸せはそう長くは続かない。N氏は次第にそんな生活に飽きてきた。そもそも人生とい

うのは、先がわからないからこそ面白いのである。それ故に、事前  
に防ぎようのない災難が襲いかかってくるのである。いつ死ぬかわ  
からないからこそ、生きているのが楽しいのである。生きているこ  
とに張りとうる程度のスリルが伴うのもそのためである。そういう  
風な苦勞を積んだからこそ、後からくる幸せを噛み締められるので  
ある。N氏のように卑怯な手段で得た幸せなど本物でありうるは  
ずがないのだ。既製のイミテーションでしかない。N氏も薄々その  
ことには気づいていた。N氏は焦った。

(たとえ、今よりも貧しくても不運でもいい、普通の人と変わらな  
い暮し、自分の力でどうしようもない運命に逆らわぬ暮しがしたい。  
自分のまわりの人は、なんと楽しそうなことか。いつ崩れるとも知  
れない物のために一生懸命になれる。私は先のことばかりを気にし、  
人間にとって一番大事なものを忘れていた気がする。私は運命を操  
っているつもりでいたが、実際は前よりもっと束縛されているの  
かもしれない。今の私は、神様が人間に与えてくれた最も大切な楽  
しみ、先がわからないという楽しみを自ら捨ててしまったのだ。)

こうなつては、N氏はこの能力を捨てたい一心であった。あの銀  
色のコインさえ捨てればいいのだと思ったN氏は、何度かそれを捨  
ててみた。たとえば、深い沼や火山の噴火口に。しかし、どこに捨  
ててもそのコインは次の瞬間にはN氏のポケットの中に戻っていた。  
老人の「誰かに譲らない限りは」という言葉を思い出したN氏は、  
誰かにそれを譲ろうとも考えた。しかし、ある者はその話を信じず、  
またある者は一度はN氏の話に乗ったが、あまりにもN氏が哀願し  
た目付きで話すので気味悪がって逃げてしまった。

アメリカに出發するという前日、N氏は自分の乗った飛行機が墜

落し、死ぬということを知った。

(とうとうこれで俺もお終いか。)

N氏は無意識のうちにガスの元栓をひねっていた。だんだん消えかかる意識の中でN氏はこうつぶやいた。

(やった、これで俺は初めて運命に逆らえたことになるのだ。)

△あとがき▽

この小説中のように未来を知り、その上で未来を変えるという事は科学的にはできないことであるが、あくまでこれは小説なのでその点は御理解いただきたい。この作品は筆者が中学三年の時のもので、それに手を加えたものである。文章その他が未熟であるが御容赦願いたい。

## ある武将の生涯

二年八組 宮 田 昌 彦

授業中、ストーブの熱気にあてられ、睡魔に襲われる時、私はいつも窓の外を眺める。そこには、澄みきった雲一つない冬の空を背景に大阪城がそびえ立っている。

そして、その姿を見る度に私の頭の中には一人の武将が浮かんでくるのだ。彼は大阪夏・冬の陣で活躍した武将である。その父は榎政関白に仕えていたが、秀吉に謀叛を企てたと疑われ、遂には限らない怨みと意地を残して自害し果てた木村常陸介重茲である。

彼は父親の汚名をそそぐため、秀吉の子秀頼への殉死を決意し、秀吉子飼いの武将が皆秀頼を見捨てていく中で、彼、木村常陸介重

茲の伴だけは見捨てなかったと、その事でこうした自分の父がどうして謀叛を企てようかと、死をもって言いたかったに違いない。

私は悲しいまでの彼の業を思う度に胸が締めつけられるのだ。

彼の氷を張りつめたような生き方と、毎日のほんとして過ごしている自分とを比べると、不思議に彼の生き方が羨ましく思えて仕方がないのだ、死んでいくとわかつていられるにもかかわらず。

何も人が血を流しあうなどという事に賛同しているわけではない、むしろ、そのような事を憎む気持ちでは誰にも負けないつもりだ。

おそらく、その羨ましいという感情は、彼の生きざまに対する劣等感から出てくるのだらうと思う。つまり、あまりに目先の事に気をとられすぎる私達に、もっと大きな観点から物事を見つめ直さなければ、と彼は教えてくれるのだ。

又、彼はやみくもに死に急いだわけではなかった。秀頼の家来として彼は非常な働きをした。例えば、冬の陣の和議で、秀頼の使いとして將軍秀忠を前にしながら、気おくれもせず命を果たし、その堂々たる態度は、彼をしてあっぱれと言わしめた程であった。そして、更に、家康からは、生かしておけば役に立つ若者だとまでも言われたのだ。この他、彼は色々と業績をあげて、さわやかに本意を吐いたのだ。家康ではないが、彼がもし生きていたら、歴史に名を残す程の人物になっていたことだらう。

しかし、慶長二十年五月五日、彼は若江方面へ出撃し、徳川方の精銳井伊直孝と戦い、再び大阪城を見る事はなかった……。

ふとベルが鳴るのに気づき、我にかえった。

私の中で、彼がどんどん大きくなっていく。



再び大阪城を眺め、彼の冥福を祈る。彼の名は、木村表門守重成  
……………

## 夕まぐれ

二年四組 椎の実

列車の中。ガタガタゴトンゴトンという快いリズム。晴れた日の夕まぐれ。秋から冬になるうとしている。まだ紅葉がところどころ残っていて、さびしい、けれど思わずほほえみたくなるような美しさがある。

戸口に立って楽しそうに話している三人の高校生。夕焼けに照らされた顔が赤い。ふと考える。彼女達の目にあの夕焼けは映っているのだろうか。座席には中年紳士が二人。一人は新聞を広げ一心に読んでいる。もう一人は腕を組み眠っている。いや、目をつぶっているだけかも知れない。二人の目に夕焼けは映っていない。五つくらい小さな女の子が、その母親らしき人の隣りに行儀よく腰かけている。彼女は、膝にのせている布袋のひもを手かららせて遊んでいる。後ろの車両から、帽子をきちんとかぶった車掌が入ってきた。女の子は顔を上げた。車掌は気にも止めず前を通り過ぎた。

「おじさん！」

車掌は振り返った。

「おじさん、ぼたんがとれてるわ。」

上着の一番下のぼたんがなかった。

「やれやれ、本当だ。ありがとうね。」

母親が『困った子ね』といったふうに、それでも少し笑って彼女

を見た。

「黙ってらっしゃい。おじさんはお忙しいのよ。」

向かいに坐っている二人の中年紳士は顔もあげない。三人の高校生はおしゃべりを続けている。

「いえいえ、かまいませんよ。たいくつそうだね。」

「そうなの。とてもたいくつしてるの。でも、お行儀よくしないといけないの。列車の中だから。」

「えらいね。」

「あら、それが当然なのよ。おかあさんが言ってたわ。」

「じっとしてるのはつまらないだろう。」

「ええ、そうね。でも、いろいろな想像してるから。それにねえ。」

女の子は、ちょっと言葉を切って、そしてまた続けた。

「とても楽しい気分よ。」

「へえ。何かいいことでもあったのかな。」

「おじさん、わからない？」

車掌は少し笑った。

「うん、むずかしいな。」

女の子は得意そうな顔をした。そして、向かい側の窓を指さした。

「ほら、お日様がまっかよ。」

母親はほほえんで女の子を見ていた。車掌は振り返った。二人の中年紳士は、同時に窓の方を振り向き、顔を見合わせてふくみ笑いをした。三人の高校生も窓の外を見た。一人が深呼吸をした。列車は夕日に照らされて走って行く。



ガタガタゴトンゴトンという快いリズム。晴れた日の夕まぐれ。

## 白昼夢—親愛なる幻影に捧ぐ—

二十年十組 石川 培 之

——白状し給え。え？ 誰の真似なの？

太宰 治「葉」より——

○ 脳裏に焼きついて離れない幻影がある。音ではない。映像ではない。それは存在である。それがこの世にあるということである。

私は、以前は、そんなものが存在するなどは信じていなかった。他人には存在しても、自分には存在しないと信じていた。しかし、それは大きな誤りであった。確かにそれは存在するのである。

なぜ脳裏に焼きついて離れないのかわからない。それが美しいからではない。それが楽しいからではない。——わからない。

○ 今、おまえを殺すといわれたら、私は、あっさり死ぬだろう。

○ 人の一生のうちで、いちばん幸福な時期とは、いつごろだろう。

誰もがいうことだが—— 幼少の頃である。若いときである。

○ 誰もいわないことだが—— 生まれる前である。

○ 言いたいことが言えないときがある。自分は、それをその人に伝えたくてしかたがないのだ。だが、魔法にでもかかったかのように、口が固く閉じてしまうのである。コミュニケーション・ブレイクダ

ウン。誤解。苦痛。意志。無頓着。視線。間隔。そして、気がつく

○

自分が心の中に描いていることを、すべて他人が知ったら、自分にとってたった一つしか残されていない幸福は、灰となる。

○

「悲しき玩具」のあとがきを読んだときの話——

「石川は遂に死んだ。」——その一行を読んだときの驚き！

○

○ なんとこの世には時間のむだの多いことか。

「徒然草」を学習すること。現代音楽を聴くこと。小説をかくこと。金の勘定をすること。ひとりよがりの考えにとじこもること。成功を夢みること。時間のむだを恐れること。そして、生きること。

○

○ ひとつの幻が終わると、また次の幻が始まる。いつまでも幻の繰り返し。

○

私という人間の歩む道は、既に神によって定められ、それからは絶対にながれることができないのである。俗に、それは運命と呼ばれる。私は、この後、何かを職業とし、誰かを妻とし、誰かを敵とし、何かを悲しみとし、そして、いつの時に死ぬのである。それは、私の努力などを超えて、もう既に決まっているのである。

○

他人から与えられたテーマで文章をかくと、つまらないことを書いてしまう。自分からすすんで文章をかくと、理解してもらえない

ことをかいてしまう。

私は、昔の私ではない。私は、時の流れと共に、どんどん変化している。一年前の私は、既に過去という時間に消え、現在の私は、未来の私に変化しつつある。私は、一年前までは生きていた。しかし、しだいにその生命を失っていき、今では、自分がここにいるのも不思議なくらいである。あと一年もすれば、私は、肉体的には生命があっても、心というものをたない、文字どおりの廃人になってしまうだろう。

私は、神の存在を信じている。但し、この神というのは、アラアの神や、ヤハウェというような宗教上の神のことではない。生命を創造した者のことである。

生命とは何と不思議なものではないか。それが故に、この世に喜びや、悲しみや、恋愛や、争いが存在するのだ。だが、人間には、なぜ生命が存在するのかわからない。そして、今後とも、絶対にはわからない。なぜなら、生命の存在は、人間の思考をこえているからである。すなわち、生命そのものが神の存在を意味しているのである。だから、神とはこの大宇宙のことかもしれないし、あるいは時間のことかもしれない。とにかく、人間は、神によって創造され、その制限を受けて存在しているのである。そして、それゆえに、これほどまでに無力な存在なのだ。

おれは、夢ばかりみている。そして、余分に生きていることにみあうだけのことをしていない。おれは、生きる価値がない。だが、

おれが死んでも、悲しむ者はいない。おれが死ぬことによって、何らかの喜びを失う者はいない。おれの死も、これほどまでに価値がない。だから、おれは生きねばならない。余分に生きるだけの価値をつくらねばならない。そして、おれの死を悲しいものにしなくてはならない。夢を見ている場合ではない。

(ある大手前生の自作アフォーリズム集より抜粋)

## CHAOS — 混沌 —

三年五組 中坊 滋

真理—これは宇宙における究極の秩序なのでしようか。いえ、これは人間が創り出した(彼の学問という遊びを満足させるために)一つの概念にすぎないのです。

ニュートン力学もユークリッド幾何も過去においてそれが自然界の真理だといわれたものはほとんど破られています。次々と真理は生まれてくるわけです。つまり、究極の秩序などという真理は誰にもわからないのです。そして、人間はありもしない真理(求めれば次々に真理らしきものが現われてくるのであるが)を追い求めようとするが故に、宇宙は混沌としているというのです。

それでは、真理の追求が学問(自然科学であれ社会科学であれ)の目的であるなら、真理が永遠に我々の手に入らない以上、学問などする意義がないと思われるかもしれません。しかし、人間には、幸か不幸か知的好奇心というものがあるのです。その好奇心を満たすために人は学問をするのです。つまり、学問とは、高い知能を必要とする(遊び)なのです。学問・芸術は人間が生きる価値という

ものを構築するために必然的に生じた遊びなのです。学問は楽しいものです。なぜなら、それは遊び（それも人間にのみ許された）だからです。そして、我々は自由に学問することができなのです。遊びに束縛はないのです。

しかし、自由と横暴は違います。民主社会においてそうであるように、我々はこの自由と横暴を取り違えてはいけません。どんなに人類が万能に見えるようでも、宇宙を支配する真理は見えないことを認識してなければなりません。

私の友人は、「学問は人々の笑顔を得るための道具である」と、いいました。これは確かに正しいでしょう。学問が人間の遊びである以上、これが人間を基準として、つまり人間のために行われるのは当然だからです。ところが、これは一歩誤ると、笑顔どころか人に針の山を歩かせることになるかもしれないのです。いや、むしろこの分かれ道の道標は、針の山の方へ向いているといっても過言ではないでしょう。この学問の人間社会への応用が持つ危険性が、老荘に学問すなわち知識をもつことを否定させたのではないでしょう。学問が机上から、街へ一人歩きし始める時、我々は深い淵の前に立たされているのです。ともかく、学問を即、笑顔と結びつけるのは正解ではないでしょう。

ところで、私たちは学問という遊びを知っていますが、実際それは、ごく一握りの人によってしか楽しまれていません。では、この人々を除く他の多くの人々はこの世へ生まれてくる価値はあるのでしょうか。生まれてきた以上生きなければならぬ。この言葉は自殺志望者の説得に使うだけで十分です。我々には精神の高揚こそが必要なのです。私たち東洋人（特に日本人）は、近代より西歐

の物質文明・分析主義を熱心に吸収し、東洋の伝統的精神を排斥してきました。ところが、分析主義の限界を明らかにした不確定性原理を見た今、我々のすべきは、もう一度先達より伝わる精神に立ちかえることでしょうか。これは別に民族意識をどうのといっているのではありません。我々がこの空間に存在し、しかも精神を満たして笑みを得ようとするとするならばすべきでしょう。その例として密教というものが挙げられます。これは仏教なのですが顕教とは非常に異なっています。私は、修業することによって宇宙の秘密を、分析によるのではなく、精神で感得できるのではないかと思っています。何やらまさに混沌とした文章になってしまい、又言い足りない事も多々あるのですが、拙文が読者の深遠なる東洋哲学的精神を少しでもくすぐることを願いつつ筆を置きます

合掌

△推薦書▽渡辺格『人間の終焉』 桐山靖雄『変身の原理』 『荘子』

## 忘れていた光景

二年六組 溝根 武史（ツチノコ）

僕は自分の生き方をはっきり変えたと言えぬものに出会った。奇妙な話ではあるが、それは一枚の小さな鏡であった。

そのころの僕はいわゆる自分の殻の中だけで生きていた人間だった。それまで人を信じたこともなく、人に頼った覚えもなかった。いや、そのつもりだった。そんな人間だったから、僕には本当の友人や恋人などはいようはずもなかった。無論、こんな生き方に満足していたわけではなかったが、そんな意識の中の矛盾も、半ば慢性化した日々を送っていた。

それは、学校からの帰り道の灰色に続く歩道のことだった。何か、丸くて柄のついたものが、少し前方に落ちていた。何の変哲もない手鏡らしかったので、一瞥を払っただけでその上を通り過ぎた。しかしその時、その鏡の中の光景がどこか変であるような気がした。僕は引き返して改めて鏡をのぞいてみた。そして自分の目を疑った。確かにその鏡の中には、げんそうな顔で見つめている僕の顔があった。が、それだけだった。つまり、その鏡は僕以外の何ものをも映してはいなかったのだ。驚いてそれを取り上げて色々な角度から眺めてみたが、その中にあるのは僕の姿だけで、映るはずの背景は全て暗黒だったのだ。

急いで家に持ち帰り、母に見せたところ、鏡と僕の顔とを交互に見比べながらいぶかしそうに言った。「どこが不思議なの。普通の鏡じゃない。」

そんなバカなと思い、翌日、学校で友人達に見せた。しかし、彼らは口をそろえて言うのだった。「ただの鏡だ。これのどこが珍しいんだ。」鏡を持つ人間しか映さないのはどうやら僕が鏡を持ったときだけらしかった。「僕には、この鏡に僕の姿しか映っていないように見えるんだ。」と言っても、誰一人として信じてくれなかった。

「どうしてこんな変なことが起こるんだろう。」それは不思議なことではあったが、鏡の中の暗闇に包まれた自分を見てみると、なぜだか、これが当たり前のような気もして来るのだった。それ以前から僕は周囲からの疎外感を感じていたのだが、その鏡の中の自分を見るようになって、ますますその気持ちは高まっていった。そんな時、僕は、何かをしなければならぬのではないか、という気持ちにとらわれることがあったが、それが何であるかはわからなかった。

そんなある日、心の落ち着かないことに耐えかねて、ついに学校を休んで、何のあてもなく郊外に出かけた。野原に仰向けに寝そべて目を閉じていると、今までのすべてが遠い昔のことのように思われた。久し振りに快い風を感じることができ、心が洗われるような気分だった。しかし、ふと見上げた抜けるような青い空に、たった一片の白い雲が浮かんでいるのを見て、自分の存在を思い出した。いつしか僕は、またあの鏡を見ていた。

そのとき、頭の方で声があったので、上体を起こして振り返った。そこには男が立っていた。その男には、前にどこかで会ったような気がしたが、思い出せなかった。彼は言った。

「あ、おう、学生さん。ちょっとその鏡を見せてもらえませんか？」

「は？どうぞ。」僕は座ったままで鏡を手渡した。

「あ、やっぱり私のだ。これ、この前私が落としたものなんです。」

僕は驚いて言った。「え、え？この鏡、あなたのですって？」

「はい、私のなんですよ。」

僕はあわててとび起きて言った。「あ、あの、この鏡、いったい何なんですか!？」僕の驚きのように、彼は少し変な顔をして言った。

「では、あなたは、この鏡の中にあなた自身の姿しかみることができなかつたんですか？」彼の問いに僕はうなずいた。「やっぱりそうですか。」

彼はそう言って、少し考えているように見えた。やがて僕の目をじっと見つめて、彼は静かに口を開いた。

「ではお教えしましょう。」彼の声は静かだったが、その口調にはなにか絶対的ともいうような一種の響きがあった。「あなたがこの鏡の中に見たものですね——あなたの生き方そのものなんですよ。」

「——わかりませんか？つまり、あなたは今まで、自分のことしか見ずに生きてきた。周囲の事などおかまいなしで、人の気持ちなどは考えたこともなかった。そうじゃありませんか？」

しばらくの間、僕は彼の言うことがのみこめなかった。しかし、考えてみると彼の言う通りだった。確かに僕は自分本位に生きてきた。やりたいことをやり、言いたいことを言ってきた。そして、何か欲しいものがあれば自分一人で努力して得てきた。まして、人がどう思うかなんて考えもしなかった。（しかし、それがどうして？）「まだわかっていないようですね。この鏡は、そんなあなたに——心のつながり」という、人間にはなくてはならないものを忘れて生きていこうとするあなたに——警告しているんですよ」

（なんだって！……僕は、あの鏡の中の自分を見て、何か迫られるものがあると感じてはいたが……。しかし、それでは、僕は誰とも、心のつながり“を持たない人間だと言うのか……。いや、そんなことはない。僕にだって、それなりに愛を感じている人達もいるのだ……。）

僕は口を開こうとしたが、彼は僕の心を見透かしたように言った。「家族や片想いの彼女のことを思っているのですか。しかし、あなたが家族に抱いている感情は、単なる同居人に対する親近感にすぎないじゃないですか。あの彼女にだって、感じているのは、愛“なんかじゃない。あなたのエゴから生まれる、”征服欲“ですよ。それらのどこに、”心のつながり“があると云うんです？」

僕は絶句し、目を伏せてしまった。しかし、その時の彼の目を見て、彼が誰であるか、を思い出した。彼は少し穏やかな調子で続けた。「実を言うと、この鏡は落としたものなんかじゃない。あなたに、

ほんとうの生き方を思い出してもらうために、私があなたの前に置いたのですよ。」彼の言うことに疑念は感じられなかった。

「私をごらんない！私にはあなたにこの鏡の中にこんな光景を見出して欲しかったのですよ！」

彼の声に僕は伏せていた目をあげた。僕がそこに見たものは、雄大な自然と、多くの人々の笑顔を背景にして立っている、まぎれもない、僕“の姿だったのだ。

## 「泣く子」と幼児教育

一年一組 浅野 晃

私はよく、百貨店へ行く。そして、食料品や玩具の売場へ行く。母親に「あれ買ってー」と泣きわめいている子供によく出会う。

私などは、その母親が子供に「ほら、あそこのおにいちゃんが見てるでしょ。」などと言うのを聞いて、恥ずかしそうに目を背けるのだが、実際、母と子の様子を見ていると非常に興味深い。まるで一つの寸劇を見ているようである。

まず、子供が泣いている。この泣き方にもいろいろあって、鼻をすすするような小さな泣き声から、売り場中の人がふり向くようなすさまじい声まである。求める物を得ると言う意志の表示には大声のほうが多いのか、小さな声の方が公衆道徳をわきまえているのか。

で、これに対する母親の反応として実に多いのが、「恥ずかしいでしょ、人が見ているでしょ。」と、子供の羞恥心に訴えるやり方である。これは私としては、誤りだと思う。四つや五つの子供がそのような羞恥心を持っているだろうか。恥ずかしいのは親だけである。



この次に多いのが、放ってしまってしう母親である。しかしながいの親は十メートルもいかないうちに戻ってきてしまう。やはり我が子は放っておけない。私はそれでは効果がないと思うのだが。同様に、放っておかれたままの子供も少ない。そして、ふり向いた母と結局は会って、先へ歩いていくのである。

さて、興味深いのは、結果的に子供の欲しがるお菓子や玩具を母親が買ってやる例はほとんどないということである。高価な玩具の類ならよくわかるのだが、安価なお菓子でもそういう例はほとんどない。私はそれが不思議だが、買ってやらないうことが正しいということは間違いないようである。何故なら、子供は買ってもらわなくてもしばらくすればそんなことは忘れてしまふようだからである。また買ってやったら凶に乗って、また他の物を要求することも多いようである。私がある菓子店で見かけた例では、その母親は店を出ては子供に連れもどされ、結局三回買わされた。

さて、いろいろこういうことを書いて来た。ここで考えていたできたのは、我々高校生の大部分は父となり、母となるであろうということである。将来自分の子供が、だだをこねることもあるだろう。そんな時、どんな教育を施すだろうか。これに限らず、親の教育こそが子供を形成すると私は考える。

我々が親になるまでにはまだ日がある。だから、私の教育法はこうだとか、そういうことは書かない。けれども、さてその場になつて、行きあたりばったりの教育をしては、それを受ける子供はあま



りにもかわいそうである。今から、暇な時にでも考えておいても、決して早くはないと思う。あなたの子供が悠々と生活するか、みじめな思いをするか、(少なくとも学生時代のうちは)あなたの幼児教育にかかっていると思う。百貨店で泣く子供を見て、この子の将来はどんなものだろうかと思いをめぐらす今日この頃である。

## 僕の音楽談議

二年七組 茨田通章

少し注意深く、自分の周囲を見回してみると、いたるところに音楽の存在しているのに気づくだろう。町を歩けば、聴き覚えのある曲が流れてくるし、大抵の人は、暇さえあればレコードを聴き、ピアノを弾き、あるいはギターにあわせて歌ったりする。音楽の嫌いな人間なんてほとんどいない。しかし、なぜ人間はこれほどまでに音楽に接することを望むのだろうか。

苦しい時、音楽を聴いて希望が湧いてきたり、不思議に気持ちが安らいだりすることがある。昔から音楽は、そうして人を助け、より人間らしく生きるために役立ってきた。例えば、死を決心したベートーヴェンに生きる意志をもたらし、数々の名曲を生ませたように。「文学は人を絶望の淵に連れてゆくが、音楽は人をそこから立ち上がらせる。」と言った指揮者もいた。楽しい音楽はより人間を楽しくさせ、悲しい音楽は人を悲しくさせるけれども、決してそれだけで終わることはない。必ず人を「生きること」に向って奮い立たせるものなのだ。簡潔に言えば「音楽は本質的に人間性を肯定する

「芸術」なのである。少し大げさな言い方になるが、人間が真に、音楽のような芸術を愛し続けることができれば、人類は決して滅びることはないと言えるかもしれない。そして、人生で最も貴重な青春に、この音楽のすばらしさを少しでも理解できたなら、それほど幸福なことはいないだろう。

音楽の持つ、他の芸術にはないような利点として、多人数でできる“ということ”を挙げたいと思う。つまりアンサンブルの楽しみ、具体的に言えばオーケストラやコーラスなどである。大手前高校では毎年六月にコーラス大会があるが、この行事は、クラス作りに役立つ、あるいは音楽に対する理解を深める、等の目的があるのだと思う。しかしこれらの目的に反するようないろんな無意識のうちに、あまりにも多く行われ過ぎていてはいないだろうか。例えば、楽譜を勝手に変えて歌うようなことがしばしばある。(強弱記号の位置を変えたり、楽譜にない休止やクレッシェンドを入れたり:「これは芸術に対する最大の侮辱である。」——シューマン——) 曲をよく理解した結果どうしてもそうならなければならない理由がある、というのならわかるが、このコーラス大会においてその理由は審査員の注意を引きつけるためではないようだ。仮にこれで入賞できたとしても、それは賞をもらったことに対する喜びではなく、歌を歌ったことに対する喜びではないだろう。音楽は自然であるのが最も美しい。そしてその自然さと、人間が生まれながらにして持っている最も人間らしい心とが合した時に音楽は最大の効果を発揮する。入賞することだけを考えたたり、技巧偏重になっては、コーラスの本当のよさがわからない。完璧に歌おうとするのも大切だが、音楽にはもっと大切な、精神的なもの、内面的なものがあるはずだ。

「ピッチ(音程)は友情である」という言葉がある。コーラスでお互いの声を聴き合うことは非常に重要だ。ただうまく歌うことを考えるのでなく常に仲間の声を聴き合って「共生感」(小沢征爾のよく使う言葉)を感じるように歌えば、自然にすばらしいコーラスが出来るのである。これが本当の技術(技巧)というものだ。そして

たときには、充実感とクラスの和の深まるのを感じるに違いない。その時初めて音楽的にもすばらしい演奏と言えるし、また、このコーラス大会の目的も達成できたと言えるのだと思う。もっと素直に楽しもうではないか。修学旅行のバスの中で歌った時のように。あるいは年配の方が一杯やりながらカラオケで歌うように。音楽の世界でよく、日本人は音楽を楽しむことができない、と言われるが、(日本のある大学の合唱団が外国の合唱コンクールで、技術的には完璧だが楽しんで歌うという点に欠ける、という理由で優勝を逸したことがある。)それをこのように表現した音楽家がいる。「音楽する」という行為を、英語でも仏語でも独語でも「遊ぶ」という意味で表現するが(例えば英語では play) 日本語では「演奏する」などというあまりにも固苦しいものだ。しかし絶対に音楽を楽しむけないということはないはずだ。ただそれを忘れたまま気付かないだけなのだと思う。日本でも「管絃を遊ばしたまひ」と表現した時代もあったのだから。

日本は世界でも有数の音楽大国になった。(ちなみに音楽大学の数、ピアノ人口などたぶん世界一だと思う。)輸入されて百余年にしかならない日本の西洋音楽のこの発展ぶりは、戦後の経済の発展ぶりと並んで世界の注目の的になっているようだ。しかし音楽(特に

クラシック)が本当に生活の一部として定着するにはまだまだ時間がかかりそうである。僕はクラシック以外の音楽はあまり聴かないが、別にクラシックに限定しているわけではない。(これは個人の好みの問題だ。)美しい音楽であればロックでもニューミュージックでもすばらしいものだ。ただやはり僕は、メロディー、ハーモニー、リズムの三要素が均等に揃った「流れ出した建築」としてのクラシックに魅力を感じる。それは現実を超越した世界である。ベートーヴェンの力強い意志の世界、ワーグナーの愛の世界、ドビュッシーの神秘の世界……これらの世界に浸ることは現実からの逃避、現実における単なるなぐさめ、などと言われるかもしれないが僕はそうは思わない。この一見非現実的に見える世界こそが真に現実的、人間的でありうるのだ。なぜなら、「音楽は本質的に人間性を肯定する芸術」だからである。

## 普 段 着 旅 行 — 沖 縄 見 聞 録

三年五組 大山 憲 司

初めに「普段着旅行——沖縄見聞録」と題された、実に百四十枚もの原稿を受けとった時は、その重さが手から不安となつて伝わってきました。「読みきれぬやろか……」けれど、ユニークな文章や随所に現れる写真のおかげか、「読もうと思えば一晩で読みきれぬ」ということを発見しました。

全部を紹介できればいいことないのですけど、スプリング2冊を沖縄一色にするわけにもいかず、その中から七枚余りを抜

粋させていただきました。

大阪南港から作者とその友人の計四人は、三十時間近くフェリーに揺られ、かなりがやがやと過ごして、那覇新港に着きました。いよいよ沖縄上陸です。港から、仲間のうちのひとりの親戚で沖縄在住のおじさんの車に乗り込みました。(編集部より)

◇

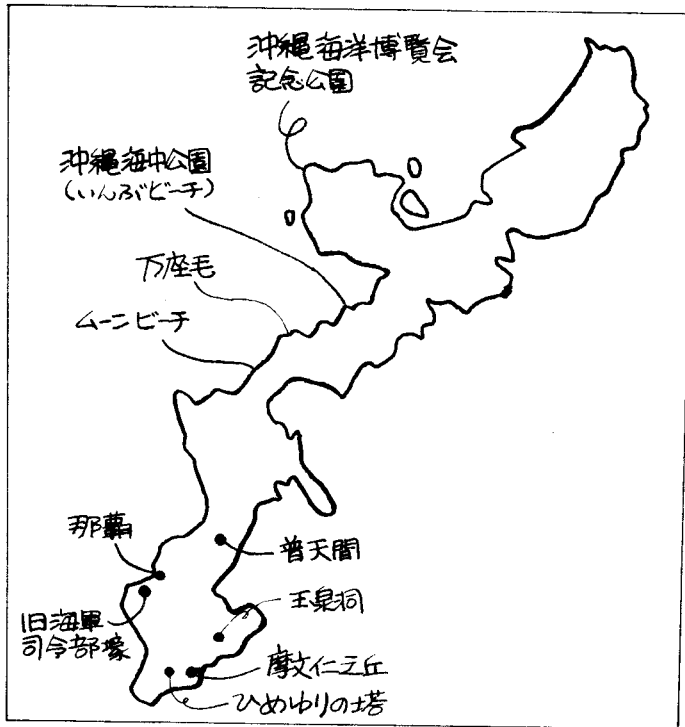
ようやく、車は那覇市のメインストリート「国際通り」に着き、旅行社で翌日のバス観光の切符を手に入れた。「ここから近いし、寄っていいかね」ということで、旧海軍司令部へ車首を向ける。

正直な話、我々の乗った車は普通の中型車であり、その後ろの座席に我々四人は詰め込まれていたわけで、隣人とピタリ密着させられて苦しくてならなかった。おまけに昼食抜きで腹ペコである。早く泊まるべき場所に行つて、このブタ箱の苦しさから逃れたいと思つていたので。そんな時、かような場所へまず立ち寄つてからと聞かされ、あまりいい気持ちはしなかった。ましてやその場所は、翌日のバス観光路線に含まれているのである。

車はそんな僕の気持ちはおかまいなく、かの有名な豊見城村を抜け、何かこやしのような鼻をつくばかりの匂いの下をくぐつて、目的地に向かう。ここで「豊見城村」を「トミシロムラ」と読むのが本土の人である。例の高校野球の沖縄の雄、豊見城村高校が全国的に知れ渡っているので無理もないのだが、そう読むと村の人はいい気持しがしないという。「トミグスクソン」が本当の読み方だ。ともあれ、旧海軍司令部に着く。これはどんな物かというところ、旧日本海軍沖繩部隊が、司令部として丘の中腹にトンネルを掘つ

て作った物である。入場料三百円をとられ、階段で地下三十メートルまで降りて行く。無論、電灯はつけてあるのだが、ほんのりと薄暗い。そして、空気はひんやりと冷たい。

中はけっこう広い。トンネルは、高さ・幅共に約二メートル余りある。わずかに湿ったその土壁は、今掘ったばかりのように生々しく迫ってくる。信号室・幕僚室などを見て回ったが、最も生々しかったのが幕僚室だった。昭和二十年・沖繩が米軍に占領された時、「もはやこれまで」と当時の上官が、手榴弾で自決した部屋である



が、漆喰で塗られた壁には、その手榴弾の破片が食い込んだ跡が、まざまざと残っているのである。それだけではない。これは翌日のバス観光で、ガイドさんに説明されてわかった事なのだが、壁の胸あたりの高さの所に、一様に褐色の太い帯が認められる。これは、当時の大雨でトンネルが胸の辺まで水でつかった時、けがを負った兵士達の血がいっしょに流れ込み、それで壁が染まったのだと言う。他に驚いたのは下士官室だ。四畳半程度の部屋が、トンネルの脇に三つ程あるのだが、当時の兵士達はこの狭い中で、立って食事をしたり眠ったりしたという。「立って」は「食事」だけでなく「眠ったり」にもかかっているのだ。それほどギュウギュウ詰めだったのである。

本当の話、我々六人の他にはほとんど入場者もなく、恐怖感さえ伴う。ここは撮影禁止になっているが、もし写真を撮ったら、傷ついた兵士達の幽霊が、ゴロゴロ写っているだろう。

旅 程	
1979年	
8月5日	大阪南港 ↓フェリー「飛龍」
6日	那覇新港—沖繩上陸 ↓ 国際通り 旧海軍司令部壕
7日	南部戦跡巡り 旧海軍司令部壕 ↓ ひめゆりの塔 摩文仁之丘・黎明之塔 ↓ 玉泉洞 ↓ 那覇ショッピングセンター
8日	ムニビーチ
9日	海洋博覧会記念公園 ↓ いんぶビーチ
10日	那覇新港 ↓フェリー「飛龍」
11日	大阪南港

外に出ると、大きな慰霊碑と当時の戦艦（であろう）のいかりを飾ってあった。その前には、時の総司令官、太田実氏の、沖繩県民の必死の応戦に対する感謝の言葉や、その県民を心配する言葉を刻んだ石碑もあった。広島原爆ドームが、一般市民の悲惨さの象徴なら、ここは、兵士達の無残な最期を示す大きな戦争の傷跡と言えそう。

◇

このあとの作者のあしどりは別表を見てください。

玉泉洞で、気が遠くなるような年数をかけて伸びてきた鐘乳石が見学路を作るために無残にも折られていたり、入場料を取るムーンビーチ、人とガラスの破片だらけの浜辺に建っているド・ホテル、濁った水や、まだ観光の手のとどいていない美しいいんぶビーチなどを見て、△あとがき▽にある様な疑問を抱きます。

（編集部より）

△あとがき▽

我々は、高校時代の大きな思い出となるであろう、この沖繩旅行を無事終え、帰ってくる事ができた。当時、やはりにはやっていたインベーターは、今や下火になり、代わりに、似た様な物で、かなり凝った機械が全盛である。わずか半年のうちに、こうも状況が変わってしまうものかと、今さらながら驚く。

戦後三十五年、復帰後七年の沖繩も、今や立派に日本になっている。それも美しい自然を残したまま。それは良い事だ。しかし、今回の旅行で感じた事を総合してみると、「画一化」と言えば聞こえはいいが、なんだか日本が日本に汚染されているような気が

する。

あのムーンビーチの浜辺に建っていたホテル、三社もあった観光バス会社、折られていた鐘乳石。観光産業が沖繩の奥深く侵入し、しっかりと根を張っている。もっとも、土地の人々が観光産業で生計を立てているのだから、張った根はもう抜けないだろう。だが、観光産業だけが、沖繩復興への道だったのだろうか。

観光産業なんてやめちまえ、と言うのではない。そんな事をしたら、この島に住む人々にとって、死活問題である。しかし、これ以上、今以上の開発は見合わせてもらいたくない、と思う（これは外部の者の勝手な言い分かも知れないが）。何年か後、再び沖繩に行った時、いんぶビーチが、あのままの姿で残っていたらどんなにか嬉しいだろう。

それから、これからの我々の大切な仕事。それは、ジョゼフとティナ（いんぶビーチで出会った幼い兄妹）が大人になった時、ケンイチとナオキ（作者が五日間お世話になった家の幼い兄弟）の家の上を、戦闘機が飛んでいないようにする事である。



## 七月、旅立つあなたへ

二年六組 あんず

アメリカに行っても、手紙を下さい

私のことを想い出すたびに、手紙を下さい

七月に、別れ別れになってしまっても、手紙を下さい。

あなたと、そのまま、会うこともなくなってしまおうとしたら  
耐えられない。

大手前高校に入ると決まった日に——それは3月20日でした——

あなたと初めて出会ってから

私は日記をつけられなくなりました

あなたに、毎日、起こった出来事を報告するからです。

だって、すべて話してしまっ、書きたいことなど

残っていなかったから。

あなたがアメリカに行けるってことを、一番喜んだのも私なら

あなたがアメリカに行ってしまうってことを

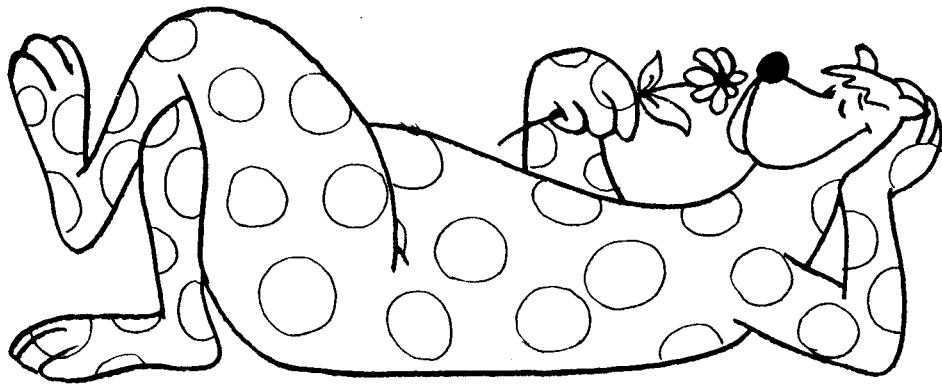
一番恨んだのも私だった。

あなたが、発つ七月までには

心を見がいて、明るい声で、心底から笑って

「いってらっしゃい」と。

「元気でね」と、言えるようにならなくては。  
ならなくては。



青春の特権とは何だろう。若さから来る経験不足を無謀とも言える大胆な行動で補うこと、つまりは失敗を恐れず行動できることだろうか。「人生いかに生くべきか」は常につきまとう問題だ。明日こそはと思っても失敗は繰り返す。繰り返す失敗の中で、未来への足掛りをつかもうとする。これが「僕たちの時代」だと思う。

さて、どうだろう。ここまでの変化に気付いてもらえたただける部分がふえた今号は、これからのスプリングに新たな方向性を示せたものと確信する。いささか消化不良気味の編集状態ではあるが、跳躍前に身が屈めるが如く、これからのスプリングの起爆剤として大目に見ていただきたい。最後に、「本当に自分が作りたいものを作ることが大切だ。」と、次号製作者へ書いてペンを置く。

## editor's P.S.

編集委員長 平山 博

# EDITORS

## 松浦正人

文化祭だ何だと異常に忙しい一年も、仕事納めです。誤字でも捜しつつ、できれば読み通して戴けますよう。——自治会欄

## 西野和義

友人から「企画倒れスプリング」と罵られながら、見よ／ちやんとできたではないか。次回は知らんよ。——青春・将来欄

## 中村美佐子

ゆっくりお弁当を食べたいなあ、とぼやきながら足を運ぶ会議室。でも“春”と一緒に、自由なお昼休みが、私の所へ戻って来るんだ／——クラブ紹介欄

## 上田祐子

春の夢 臍気に咲き  
春の夢 密やかに逝く  
古都の庭先 野辺の送り  
ふりむけば ただ閑かさ  
by まさし & Ponta — 文芸 II 欄

## 澤田 渉

今までとは一味違う記事にするのが目標でしたが、はたして成果は如何に?……それは、あなたの目で確かめて下さい。

——クラス紹介欄

## 久保あや子

何かをやり遂げる難しさ…。私にとってスプリングは“しんどかった”というより“難しかった”という方があてはまるでしょう。——インタビュー欄

## 安井克典

先輩方に引っぱって戴き、何とか完成に到達できました。共感なり反感なり、何かを感じて下さい。——青春・将来欄

## 神野久美子

やっとできあがりました。残さず読んで、ずっとそばにおいてやって下さい。——文芸 I 欄

## 溝根武史

白いページの僕の文字は  
青い道を生きた僕の足跡  
いつか道は途絶えようと  
それは明日への方角を教える。

——ツチノコ(キャステキノ)

先生紹介欄&このページ

## 笹倉邦彦

“No goal is too high if we climb with care and confidence”仕事を通して厳しく鍛えられるものがありました。君も何かを感じて欲しい。訪問記欄

## 平山 博

◇

## 中村栄和

協力

お世話になった先生方  
石川承紀 先生  
井手昂 先生  
佐野富士彌 先生  
竹田紀子 先生  
長田廣明 先生  
森一雄 先生  
渡辺光一 先生

スプリング21号はここで終わる。だが、“僕たちの時代”は今、始まったばかりだ。